

〔資料〕

玉川大学教育学術情報図書館蔵 『本譽空無上人道影贊』 翻刻と解題

関口 静雄

〔解題〕

玉川大学教育学術情報図書館蔵『本譽空無上人道影贊』（版本一冊）を翻刻紹介する。薄識にして他に所蔵あるを知らない。本譽空無は江戸下谷池之端浄土宗影向山心行寺三世で、浄土木食を自称して江府六所にいわゆるはじめの六地藏を建立した人として知られる。しかし六地藏建立のいきさつやその生涯は埋もれたままである。本書は新出の本譽空無の行状記であって六地藏研究や近世木食研究に資するところ少なくあるまい。紹介する所以である。翻刻を御許可下さった玉川大学教育学術情報図書館に甚深の謝意を表す。

本書は右図書館の標目書名に『本譽空無上人道影贊』とあり、出版事項に元禄三年（一六九〇）刊とするが、表裏表紙を欠いていて発行時の原題が知れず、版元の記載も刊記もなく、また複数の年記を有するから刊年を元禄三年とにわかには断じきれない。現況は袋綴仮綴装十三丁から成り、これを表裏表紙を付けず仮綴紙綴装のまま、すなわち本譽空無の肖像を描いた現況一丁目表「蓮池慈濟老師衝影」を表裏表紙として頒布されたとも考え得るが、終丁が半切なので、当初発行時には表裏表紙が存したと判断できる。するとその表裏表紙には打付けなり題簽なりで書名が存していたはずで、それはおそらく「心行寺第三世源蓮社本譽空無人行狀」であったと推測されるが、逸失ゆえに断定は控える。今は本書書名は右図書館の付した標目書名『本譽空無上人道影贊』を尊重することにする。なお、現況全十三丁の構成は下記のようなものである。

①「蓮池慈濟老師衝影」（署名・落款なし）及び

「本譽空無上人道影贊」元禄壬申季秋穀日一髮道人無生敬題

版芯柱題「空無上人道影贊」、丁付一〜二丁。

②「慈濟本譽上人行録序」元禄辛未夏日宗忽天倫題・南岳悦山宗書（無年記）

版芯柱題「空無上人行狀序」、丁付一〜五丁。

③「心行寺第三世源蓮社本譽空無上人行狀」元禄三庚午年臘月朔日

門弟子某等編版芯柱題「空無上人行狀」、丁付一〜六丁。

右に見るように、本書現況袋綴装十三丁一冊は元禄壬申五年（一六九二）秋の版行であると知れる。しかしおそらくそれ以前に元禄庚午三年（一六九〇）十二月一日に門弟子某等が編じた「心行寺第三世源蓮社本譽空無上人行狀」が版行されていたものと考えられ、それがさらにその翌元禄辛未四年（一六九二）夏付の臨濟僧宗忽天倫及び黄檗僧南岳悦山道宗の序文を付して版行されたと推量される。すなわち重言すれば、まず門弟子某等編「心行寺第三世源蓮社本譽空無上人行狀」（六丁）が版行され、それに宗忽天倫と南岳悦山宗の序文（五丁）を付したものが版行され、さらにそれに「蓮池慈濟老師衝影」と一髮道人無生撰「本譽空無上人道影贊」（二丁）を付した全十三丁一冊に表裏表紙を装幀して版行されたと考えることができると推量し、推量を加えれば、おそらく門弟子某等編「心行寺第三世源蓮社本譽空無上人行狀」は心行寺蔵版だったはずで、本譽空無の行業が周知され世評が高まるにつれて宗忽天倫・悦山道宗・一髮道人無生ら他宗高僧の贊や序文、また無名氏筆画の道影を得たものであったと思われる。因みに宗

忽天倫（一六二六—一六九七）は丹後の人で、臨濟宗京都大徳寺二一八世を  
 経歴して元禄二年江戸品川万松山東海寺在上一世位に就いた人であり、悦  
 山道宗（一六二九—一七〇七）は福建省の人で、明暦三年（一六五七）に渡  
 来し、延宝四年（一六七〇）大坂生野の聖徳太子創建という南岳山舍利尊  
 勝寺を黄檗宗寺院として中興開山し、のち宝永二年（一七〇五）黄檗山萬福  
 寺七世住持となった人で、ともに禅の高僧であるが、一髮道人無生につい  
 ては知るところがない。なお「空無上人道影贊」の年記中の「壬申季秋穀  
 日一髮道人無生」は「壬申季秋穀旦、髮道人無生」とも解せるが、ここで  
 は「壬申季秋穀日、一髮道人無生」と解した。また二顆の篆印の一つは  
 「密林居士」と読めるから、一髮道人は空無と同じ浄土門の人物ではなさ  
 そうである。それについて宮城県立図書館デジタルアーカイブ叡智の杜目  
 録に伊達文庫本として密林居士著釋方正編『毘那密林居士大觀藁』（版本  
 一冊。正徳四年（一七一四）跋。未見）が載り、同図書館による書誌注記に  
 「日本文学・漢詩文・禅宗」とあるが、この密林居士と一髮道人が同一人  
 物とすれば洞門の人であったかと推量される。しかしいまだ空無と曹洞宗  
 僧との交流の確実な痕跡を見出し得ないでいる。

※

本蒼空無の名や事跡を『縁山志』『浄土伝灯総系譜』『蓮門精舎旧詞』を  
 はじめ蓮門の主だった文献資料等々にいまだ見出せないでいる。本書『本  
 誓空無上人道影贊』の巻頭を飾る賛や序文が他門の人士によるものであり、  
 空無には六地藏建立という大業のほかには、『発願文和談抄』（元禄七年（一  
 『巡六地藏慈悲利益記』（宝永四年（一七〇〇）・『大黒天靈験記』（享保三年（一  
 夜念仏発願由来根元記』（享保五年（一七二〇）刊）等の著作もあり、ことに享保五年（一  
 七二〇）正月柳屋徳右衛門・松屋金四郎合梓板『十夜念仏発願由来根元記』  
 の序に「享保五子正月中旬空無九十一歳謹書」とあって卒寿を超え  
 ても著作に励んでいたことが知られる。そうした空無について同門の衆僧  
 人士に言及がないのは不思議というほかはなく、まして近代の斯学研究者  
 にも空無の行業や著作についての論考を狭隘にして知らない。空無とその  
 業績は蓮門宗史に深く埋もれ、その存在さえなかったがごとくである。

おそらく空無の行状を伝える唯一の伝記は『江戸名所図会』（全二〇冊）

編纂で名高い齋藤月岑の『東都歳事記』（天保九年（一八三八））巻四「附録」に  
 載る次の一文であろう。町名主いわば市井の文人考証家による紹介である。

○最初建立江戸六地藏參

銅仏立像壹丈なり慈濟庵空無上人勸化の助力を以建立あ  
 り元祿四年に開眼供養有し由江戸砂子に云り

- 一番 駒込瑞泰寺
- 二番 千駄木ハヤ専念寺
- 三番 日暮里ハ浄光寺
- 四番 下谷七軒丁心行寺

五番 上野大仏堂の内江戸砂子には大仏堂側  
慈濟庵に在と記せり

六番 淺草寺中正智院六所の内當寺のミ此地藏尊を安置せり  
御丈三尺はかりの地藏尊を安置せり

心行寺三世源蓮社本蒼空無上人ハ石見州の人寛永庚午十二月生る十三の年幡  
 随意院に入り其外下総大岩寺武州増上寺等に隸す浄土に葵傾して専念の法を  
 修し又銅像泥塑の佛并を造りて諸人に施す事大方ならず貞享の頃疾を以て院  
 を辞し荷葉庵に退く又萬日念佛會を修し四世還響空哲に至て元祿庚午四月に  
 滿散す是より先己巳廻春近隣某信士夢に地藏并を感ずる事あり、後に一僧士  
 に告て云、某処に木彫の地藏尊長壹丈なるあり、汝供養せんと欲せハ与ふへ  
 しと士歡てこれを迎ふ時に上人云ねがはくハ我に与へよ我これに依て大像六  
 軀を鑄造して武城の六所に安すへしと士恚て又これを上人に与ふこゝに於て  
 四衆競て浄賤を捨日ならずして像成り件の六所に安す後居所を改めて扁して慈  
 濟庵といふ按に上野大仏堂の側なり以上上人行狀記の要を採る

とあって「江戸砂子」を参照し、さらに「上人行狀記」の要を採ったと記  
 している。「江戸砂子」は『江戸砂子温故名跡志』<sup>3)</sup>（享保十七年（一七三二））巻三に、

慈濟庵空無上人勸化の助力を以金銅立像八尺の地藏六軀を造立し江戸六ヶ所  
 に安置す元祿四年開眼供養を執行すこれをはしめの六地藏といふ所謂六所ハ

- 一番 駒込 浄土 瑞泰寺
- 二、 千駄木 浄土 専念寺
- 三、 日暮里 諏訪 浄光寺
- 四、 池端 心行寺
- 五、 東叡山 大仏側 慈濟庵
- 六、 淺草寺内 正智院

とあるのをいっているのであり、「上人行狀記」はその内容からして玉川大学教

育学術情報図書館蔵『本譽空無上人道影贊』に合綴された門弟子某等編「心行寺第三世源蓮社本譽空無上人行狀」であることは疑いを入れない。なお正元坊建立の六地藏のことは同じく『江戸砂子温故名跡志』巻三に、

○醫王山真性寺 御室末 すかも

本尊薬師如来 聖武帝勅願 行基の作

地藏坊正元法師建立唐銅六地藏の三番也所謂六軀ハ

一番 品川 真言 品川寺 二、四谷 浄土大宗寺

三、巢鴨 同 真性寺 四、山谷 禪 東禅寺

五、深川 浄土 靈巖寺 六、深川 真言 永代寺

とあり、また「されは宝永年中沙門正元坊か建立せし金銅丈六の六軀ハ世に後の六地藏といふと也」とある。

※

一髪道人無生は「本譽空無上人道影贊」に「除<sub>レ</sub>陰<sub>ヲ</sub>絶<sub>シ</sub>穀<sub>ヲ</sub>」「萬日會滿<sub>テ</sub>」「範<sub>ニ</sub>六地藏<sub>ヲ</sub>」「慈濟本譽上人行録序」に宗忽天倫は「長季木食」「根門刃除」「鑪<sub>ニ</sub>就地藏<sub>ノ</sub>銅像長<sub>ク</sub>壹丈<sub>ナル</sub>ヲ安<sub>ニ</sub>テ諸<sub>レ</sub>東都ノ六招提<sub>ニ</sub>、悦山道宗は「彌陀ノ寶號宣言<sub>ハ</sub>萬畫<sub>ニ</sub>」「地藏ノ銅軀範<sub>ニ</sub>六尊<sub>ヲ</sub>」等々と空無が男茎を切除した羅切の木食行者であり、万日念仏会を成就し、東都の六精舎に地藏菩薩銅鑄像を安置した行業を高く讃している。さらに一髪道人無生は「曾<sub>テ</sub>著<sub>ハシ</sub>藥辨<sub>ヲ</sub>大<sub>ニ</sub>醫<sub>ス</sub>邪乘<sub>ヲ</sub>」と空無に「藥辨」の著作があり、医業に精通した医僧でもあったことを伝えている。

本譽空無の行状のおおよそは『東都歳事記』に載る略伝によって知られるが、同書が依拠した門弟子某等編「心行寺第三世源蓮社本譽空無上人行狀」を檢すると、空無の実像が一層髣髴する。

すなわち、本譽空無上人は諱を遵察、字を空無といい、社号は源蓮社、みずからは放憨子と称した。石州石見の人で、父は山口、母は某氏。寛永七年（一六三〇）十一月三日の生まれで、凡ならず九歳にして幡誉上人に投じて剃染し、方誉上人に従って業を受け、十三歳にして幡随院すなわち武州下谷池之端の神田山新知恩寺に入って浄教を学び、十七歳にして下総生実龍澤山大巖寺に登り、二十二歳にして武州三縁山増上寺に隸した。

正保年中（一六四四―一六四八）には識見の浅薄を自省して目黒山瀧泉寺不動に詣して断食千拜、下山して宇賀神を禱して毎夜万返誦呪すること三年、さらに月毎に相州江之島に詣して弁天の靈応を受けたが、しかし小石川無量山伝通院開山了譽聖罔上人の頂相を夢見て浄宗に縁あるを確信し、三密観行による度生の難儀を知悟し、二十四歳にして陰を自積して姪欲を断ち、穀を断ち鹽を断った。

一日芸州巖島華降山光明院に詣し、開山信譽以八上人余風の行業純一なる化に夥多の縋素が深く欽仰して従う光景を見聞して帰るや、幡随意院岳誉感随上人に従って浄土血脈と圓頓菩薩戒を受けた。明曆年中（一六五五―一六五八）には心行寺二世純誉長然上人に迎えられて三世を継ぎ、心行寺開山円誉利的上人創始の万日念仏会を高足空哲等同志五人と再興し、穀を断ち衣を披て常在仏前、長坐不臥、日々五百拜を課すること十年、寛文中（一六六一―一六七三）の一日、黙坐中に諸菩薩・護法善神の来現を感じ得した。仏天の加被を知ってみずから三尊を刻み、仏工に命じて一百尊を造らしめ、これを寺内聖衆堂に安置し、また泥塑像・銅鑄像を造り、画像を印施し、聖号を手書して衆庶に施した。説法の法筵ごとに受訣するもの凡そ十萬。時人は蓮池の木食上人と讃称した。

浄教門の名徳に倣って禅要を探究していた一日、折しも来訪した黄檗の一居士と方外の交誼を結んで日夜道話するに、居士の詰問に茫然とし、禅要の必須なるを感じて打坐に精励した。するとまた一夜心行寺に遊んだ居士から示された詠歌によって仏心宗に不伝の妙あることを確信した。

貞享元年（一六八四）五十四歳のとき疾を得て院主を辞し、高足還誉空哲に心行寺四世を譲って荷葉菴に退隱し、ここを終焉の地と定めて或いは念仏し或いは坐禅して瀟洒の日々を送った。一日上人の身悴精涸を知って二人の僧が訪れ、『蘇波呼童子經』『瞿醯經』等に載る「有<sub>レ</sub>斷<sub>レ</sub>食<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>食<sub>レ</sub>鹽<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>食<sub>レ</sub>油<sub>ヲ</sub>」等の一文は垢膩を除いて身の清浄を保つための法であって仏道を妨ぐためではない等々の教訓をしたが、上人は笑って不持斎は天台定心院の成意比丘に倣ったのだと応え、鹽を受けこれを嘗めたが壮年以來の辟穀は改めなかった。

こうした日常を送る上人を欽仰して四来蟬聯し、小仏を求め聖号を求め



た。上人は一尊を与えるごとに称名念仏を教え、百声を千声に、一万声を十万声に至るようにと善巧方便をめぐらし、さらに一日『天如惟則禪師語錄』（第六「銅佛贊頌序」）に載る錢塘照庵の炬菩薩が四十八人会を結んで銅像を鑄した話を読み、これに倣って弥陀像一千体を鑄て道俗深信者に施した。すると一夜の夢に姿色典雅な女人が現れて上人の施行を讃じ、老後の利益、往生の助因となるからさらに造仏すべきを勧め、ために擁護して家珍を喜捨すると告げて不忍蓮池に帰った。夢覚めて上人はかの女人は弁天か龍女であろうと察し、これを教訓として弟子たちに夢語りして、貪求財利の庸輩が魔魅妖怪によって魔往生に引導される危難恐怖を説いた。

元禄三年（一六九〇）四月十五日、万日念仏会を満散成就した。しかし心行寺を継いだ四世空哲は早世してすでになく、後事は同志らの助力に依ったのだった。念仏会満散成就の噂を聞いて江戸の貴賤、諸国の縋素が蟻集して歓喜称讃し、或いは十声念仏を乞請し、或いは上人手書の名号を求める者数方に及んだ。時に上人歳六十一。浄土の訣を授与した道俗一百余人、僧尼を度すこと若干人、問法結縁者はその数を知らない。

ちょうどそのころ近隣に地藏菩薩の靈応を夢に三度も受けたという信士があった。信士は昨元禄二年晩春二十四日に地藏菩薩を夢に見たが、今年また愛宕山に勝軍地藏菩薩を拝す夢を見、さらに同三年中、付与しようという人から得た端巖妙相の瞻仰すべき地藏像を一室に安置する夢を見た。こうした一日信士のもとへたまたま一人の僧が来て、某所に長一丈の木彫地藏像がある。莊嚴供養するなら与えようという。信士は歓喜してこれを譲り受け自邸に安置したのだという。この話を耳にした空無上人は信士に逢って、「幸々、我ニ與ヘヨ。我此ノ大像ニ依ツテ銅像六軀ヲ鑄造シテ武城ノ六所ニ安置ジテ、以テ羣生ヲ福利スベキヲ欲スルナリ」と力説すると、信士は大喜してこれを上人に譲った。ここにおいて四衆は競って浄財を喜捨したので日ならずして鑄像は完成した。まことに奇事というべきで、同様の奇瑞は鎮西の聖光上人、信貴山の円能上人など地藏の靈応を得た所伝は史籍に載って枚挙にいとまがない。ここに上人は老母尼に孝養を尽くし、居を慈濟菴と改めて扁額した。上人は弥陀と地藏の願によって尽未来際に迷倫を救度せんの素懷を抱いているが、御歳はすでに甲子六十を過ぎた。

ここに上人の行実を略記して慈誨の万一に酬うものである。時に元禄三年庚午年臘月朔日、と伝えている。

門弟子某等編「心行寺第三世源蓮社本誓空無上人行狀」（以下『空無行狀』）を一読して、これが万日念仏会が元禄三年四月十五日に満散成就したこと、また銅鑄六地藏が完成し、これを江府六精舎に分置し終えたことを記念し、併せて空無の還曆を慶賀するために急ぎ編纂上梓されたものであると知れる。おそらく万日念仏会のために、或いは六地藏建立のために喜捨施財の芳志を捧げくれた夥多の道俗に頒布されたらう。門弟子某等編とある某は宗忽天倫の序に「其、徒運譽及檀信」という運譽と思われが、某は本来であれば「還譽空哲」と記されていたはずである。空哲は中絶していた開山圓譽利の上人創始の万日念仏会を師匠本誓空無とともにその中興を仏天に堅く誓った一人であり、疾を得て退隠した空無を継いで心行寺四世の席に着くや「哲も亦戒律嚴整ニシテ兼テ助ニ修造ニ金仙ノ殿香積之堂頗ル勝レリ於舊觀ニ」という持戒持律の上に寺院経営にも励む活躍ぶり、空無ならず檀信徒も心恃みにしていたことであろうし、万日念仏会が満散成就した折は、その結願法要の大導師は当然空哲が執るはずであった。しかし空哲は早世したのである。それで再び空無が病を押し、或いは病癒えて運譽ら弟子たちの助力を得て万日念仏会の継承を導引したのである。空無を歴史上存在しない架空の人物と推量するむきもあって驚くが、享保五年正月中旬には『十夜念仏発願由来根元記』（三巻三冊）の著作があり、長齡九十一歳を迎えても健筆を振るっていたことが知られる。しかしその歿年世寿は明らかではない。

※

菊岡沾涼が『江戸砂子温故名跡志』に「はじめの六地藏・後の六地藏」と称した本誓空無と地藏坊正元の六地藏建立は近世仏教史上に遺る大業である。空無は東叡山麓池之端を本拠に、正元は隅田川を越えて新開の深川を拠点に活動したのであるが、正元は六地藏建立を宝永三年（一七〇六）五月に発願し、享保五年（一七二〇）七月に第六番目地藏を永代寺に奉納して業を終えた。およそ十三年余を費やし、二年あるいは三年をかけて勸募しては一軀、勸募してはまた一軀と順次建立したのであるが、しかし空

無はそうではなかった。斎藤月岑編『武江年表』<sup>4</sup>(嘉永三年<sup>一</sup>八五〇刊)元禄四年(月日不記)条に「慈濟庵空無上人勸化して造る所の金銅立像の六地藏尊開眼ありて江戸六所に分つ、寺院号并縁起等と伝えるように、空無は地藏像六軀を一挙に鑄造し、これを開眼供養して江府六所の六精舎に分置したのである。驚くべきは銅鑄像の鑄型とした木像地藏像を一信士から入手してから、発願・勸募・造像・開眼供養にいたる一連の事業をわずか一年ほどの短期間に遂行したことであって、それはまさに『空無行狀』に伝えるように「誠ニ一奇事也」というほかはない。

しかし空無六地藏の開眼を元禄四年とする所伝にはいささか注記を加えておく必要がある。月岑が『武江年表』『東都歳事記』に空無六地藏開眼を元禄四年とするのは沾涼の『江戸砂子温故名跡志』に「慈濟庵空無上人勸化の助力を以金銅立像八尺の地藏六軀を造立し江戸六ヶ所に安置す元禄四年開眼供養を執行す」とあるのに拠ったからだが、沾涼が何に拠ったものか明らかではない。越前敦賀の読譽必夢撰『仏説延命地藏經直談鈔』<sup>5</sup>(元禄十年<sup>一</sup>九七二月版)卷十二附録「武州江戸六地藏菩薩」は「右六地藏尊ハ立像八尺慈濟庵空無上人勸化ノ助力ヲ以テ是ヲ鑄玉ヒテ元禄三年ニ出來シ四年ニ開眼シ件ノ精舎ニ寄附セラレシト具ニハ意趣アリ茲ニ畧ス」と明瞭に記し、「具ニハ意趣アリ」と依拠資料の存在を示唆するが、それが何か明らかにはしていない。月岑も沾涼も必夢も記事著述にあたってはその出所を小まめに記しているが、しかし空無六地藏についてはそれが無い。慥かに開眼供養は行われたはずであるが、それは元禄四年であったのか。仏教行事の普遍的な常識からいえば開眼供養は開眼とそれにふさわしい供養が行われることであって、これがすべて満了してはじめて開眼供養は成就したと云い得る。たとえば仏像製作において、仏師が製作し終えただけでは、それは木片にすぎないのであって、開眼と供養が執行され終わって初めて、衆生は成身の仏像すなわち靈力を發揮し功德を付与してくれる尊像の完成と確信するのである。開眼供養について問われた法然上人は、「開眼ト。供養トハ。別ノ事ニテ候ベキヲ。同シ事ニ。シアヒテ候ナリ。開眼ト申ハ。本躰ハ。佛師カ。眼ヲ入レ。開參セ候ヲ申候也。是ヲバ事ノ。開眼ト申候也。次ニ僧ノ佛眼ノ。真言ヲ以テ。眼ヲ開キ。大日ノ真言ヲ以テ。

佛ノ一切ノ功德ヲ成就シ候ヲバ。理ノ開眼ト申候也。次ニ供養ト云ハ。佛ニ香花。佛供。御アカシナンドヲモ。參セ。サラヌ。寶ヲモ參セ候ヲ。供養トハ申候也」(二百四十五箇条問答)<sup>6</sup>と事・理の開眼と供養の辞義を教訓しているが、わが国においては開眼と供養は一体のものと考えられてきたのであって、たとえば本邦最初の開眼会とされる天平勝宝四年(七五二)四月九日に行われた東大寺盧舍那仏のそれも開眼供養会であった。『続日本紀』<sup>7</sup>同日条に「盧舍那大佛ノ像成テ、始テ開眼ス」とあり、『東大寺要録』<sup>8</sup>卷二「供養章第三」には「一開眼供養会」として「九日、太上天皇、太后、天皇、座東大堂布板殿、以開眼、其儀式並同元日」とあって、「開眼師天竺僧菩提僊那が縷繩の着いた筆を執って点晴した。開眼が終わると読師延福法師が華嚴經を読み上げ、講師隆尊律師がそれを解説した。次いで九千余の衆僧が入場着座し、次いで大安寺・葉師寺・元興寺・興福寺から種々の奇物が奉獻された。次いで楽人が入場し、伎樂があり左大臣橘諸兄が鼓を打ち、樂舞があり雅樂寮によって大歌女・久米舞・唐古樂・跳子名・高麗樂等々が演じられて開眼会は終了した」と伝えている。その次第をみても大仏開眼会が供養会と一体のものであったことが知れる。重言すれば、盧舍那仏は開眼されてはじめて、単なる銅製の物体から宗教的存在になったのである。<sup>9</sup>

右のように考えると、『空無行狀』に開眼供養の記載はないが、それが銅鑄像完成後すぐに行われていたことは月岑・沾涼・必夢の記載を俟つまでもなく、『空無行狀』卷尾の一文「益欲下依彌陀地藏之願盡未來際救度迷倫上<sup>上</sup>也」<sup>10</sup>によって知れる。すなわち空無建立の六地藏は、その本願を成ずるために迷倫に沈む衆生を未來永劫永遠に功德を施し得る成身の弥陀地藏の尊像であると認識されていたのであって、そうであればこの一文を巻尾に載せる『空無行狀』の擧筆日である元禄三年臘月朔日以前に開眼供養は執行されていなければならない。もって空無建立六地藏の開眼供養は元禄三年(一六九〇)であったと解する所以である。

なお空無が一信士に激しいばかりに六地藏建立の意義を意思堅固に伝えたのには伏線があった。空無は六地藏建立後十七年を経た宝永四年(一七〇七)一月、自撰した『巡六地藏慈悲利益記』<sup>11</sup>を松会三四郎から版行した。

巻頭を黄檗の禅僧妙幢淨慧の序が飾る三十章から成るもので、六地藏建立の意義や縁起・六所六地藏の靈驗利益・巡六地藏の先例等々を詳述している。淨慧の序によれば、「かつて空無上人が六地藏を建立した時、禅林の龍象たちが挙ってこれに随喜し、記や贊を贈ってその功業を顕揚したが、上人はその記・贊を一書に纂して『巡六地藏菩薩記贊』と書名して上梓したのだった。しかしその文たるやあまりに高尚難解であって童蒙のよくするところではなかった。そこで上人はこのごろこれを和語に綴って六地藏の大事の功德を敷演しようとしたのである」という。この淨慧の序によって空無が『巡六地藏慈悲利益記』を自撰し版行した経緯は明らかであるが、それを急いだのは、おそらく地藏坊正元の動向に触発されたからだと思われる。

正元は宝永三年（一七〇六）五月、江戸城下に六地藏造立の発願を宣し、『當國六地藏造立之意趣』<sup>11</sup>を版行した。その意趣は「抑帝都六地藏の濫觴ハ 人王五十四代仁明天皇の御宇參議小野 篁 平等利益の旨を思惟し給ひて六道の能化なればとて 自六地藏を造立して天下安全宝祚延長洛陽繁栄を祝願し曾諸人往來の街に安置し 奉て一切衆生に 周縁を結しめ給んとぞ帝都今の六地藏は也 我既時節を多て今年六昧の尊像造立を催 此書見聞の人と吾志を哀給て一紙半錢の撰なく助とを加させ給へ我生と世に於て永其恩を報べし」というもので、それはかつて空無が抱いた本懐と同じだったのである。『巡六地藏慈悲利益記』「第四、江戸六地藏鑄形木像湯嶋靈雲寺安置之事」の一節に「しかるにかの地藏を、空無契約をなすことは、其頃越後の・五智の如来、雷火に燒させ。たまふよしを・傳聞より、越後の・五智建立の・一念發といへども、彼寺は天台宗にて、他門より再興の志かなひがたき故に、思とゞまりて。京都の六地藏の・事を思つゞけて、江戸には未六地藏なきゆへに、造立を思立はんへりし」と記し、巡六地藏建立が本懐であり悲願であったことを明かしている。ここに一信士に地藏木像の讓渡を強く迫り、また『巡六地藏慈悲利益記』を著述した理由が得心できる。五智国分寺は聖武天皇建立と伝える古利。天和三年（一六八三）五月二十五日に参詣した大淀三千風は「さて名高き越後の護國山國分寺の大伽藍は、聖武帝御建立日域第一の五智尊。座像五尺有餘。放光蓮臺に膝をならべて座し給ふ。」（『日本行脚文集』<sup>12</sup>卷一）

と記す。これに曳かれて松尾芭蕉も元禄二年（一六八九）五月五日同郷の先達三千風を仙台に訪ね、七月十一日加賀街道を通って五智国分寺と居多神社を参拝した（『曾良日記』）。その十月二日、日域第一の五智如来は雷火に遭って全焼してしまった（寺伝）。空無も越後の五智如来が日本第一という評判を耳にしていたのだから、だからこそこの焼失を伝聞してその再建に名乗り出たのである。しかし他宗ゆえを以て許されず、仕方なく願を変じて京都の六地藏に倣って江戸に六地藏を建立することにしたのである。その思いは募るばかりだった。その年、空無は甲子週した還暦六十を迎え、迷倫救度の本懐は深まるばかりであったに相違ない。

※

元禄三年（一六九〇）中に六地藏を建立供養した空無は、銅鑄像の鑄型とした木像に彩色を施し、これを湯島靈雲寺に寄進した。そのことを『巡六地藏慈悲利益記』「第四、江戸六地藏鑄形木像湯嶋靈雲寺安置之事」は「幸に此木像を鑄形として、銅像の六尊出生したまふゆへ。元の尊形をば空無彩色し奉。靈雲寺に寄進せしに。覚彦律師又是を再興ありて。今は阿字變て。訶字の地藏尊と。結構七宝莊嚴の尊像有かたく拜奉るなり」と伝えているが、靈雲寺は元禄四年（一六九一）八月二十二日の創建なので、おそらく開山後のことと推量される。喜んだに相違ない。寄進を受けて覚彦淨嚴は同六年、堂を建ててこれを祀っている。蓮体撰『淨嚴大和尚行状記』元禄六年（一六九三）条に「今年三間四面ノ堂ヲ建ツ。本尊ハ木食空無力寄附セルナリ。靈驗掲焉ナリ。」<sup>13</sup>とあって慥かめ得るが、現今地藏堂内には彩色一丈の地藏菩薩像は見当たらない。なおその地藏菩薩像は『空無行状』の記載から木造勝軍地藏菩薩立像であったと考えられる。空無が木像勝軍地藏を彩色莊嚴して靈雲寺に寄進したのは、もちろん靈雲寺開山の祝意もあつたろうが、この木像を一信士に齎したのが靈雲寺覚彦の弟子僧だったからである。『空無行状』の所伝を補って、空無は「第四、江戸六地藏鑄形木像湯嶋靈雲寺安置之事」に「さて此木像の因縁は。真言の所化に。元智といふ僧あり。或信心の人の家に。ゆきし所に。其あるじ。或夜靈夢を見たまふに。未二三日もすぎずして。板橋の町近所の寺に、地藏の尊像あるよしをあるじに。元智物語いたしければ、右の靈



夢符合せることを感得して、此尊形を求めて安置したまふなり。元智今は覚彦比丘の弟子になりて、名をかへて禪融房といふなり。」と記している。この禪融房こそ木像をもたらした「空無行狀」にいう「一僧」であって、元禄十年覚彦撰『屈請諸德疏』(写一篇、教興寺藏)の靈雲派諸德の中に「上板橋文殊院 禪融房」と見える、上板橋文殊院止住の僧であった。この禪融房が「板橋の町近所の寺」にあった地蔵尊像を一信士のもとに齎したのであるが、その寺名と一信士の名は明らかではない。しかし推量の手立てがわずかに存する。空無建立六地藏のうち、唯一原形のままといいう第二番千駄木林一心山専念寺の宝珠地藏である。尊体表面には造立願文と夥しい結縁者名が陰刻されているが、喉元から胸部中央にかけて、老弊の眼路の及ぶところ、

助縁 同國同郡板橋根葉村法谷山蓮華寺前任權大僧都

國家安全

頼見法印有壽 元智房有像 無覺元了居士

分置干武藏州六所

本願化主同國豐嶋郡江戸下谷池之端影向山

心行寺第三世

休隱慈濟菴淨土木食 比丘源蓮社本誓空無作

南無阿彌陀佛

第二尊

寶珠地藏

餓鬼道教主

伏願

見聞引撰六道衆生自他托生

九品蓮界

有無二縁十方

助縁 七衆諸檀越等

と刻されていて、これが下谷池之端影向山心行寺第三世を経歴し同寺慈濟菴に休隱した浄土木食本誓空無の作であることを伝えている。ここに『空無行狀』に「今改テ所居ヲ扁シテ爲ニ慈濟菴ト」とあるのは転居したのではなく、休隱後に止住した荷葉庵の庵名を慈濟庵と改め扁額したこと、それが六地藏建立発願に当たったことであり、心行寺山内にあったことが知られる。空無はこの慈濟庵を六地藏建立の拠点勸進所としたのである。

尊像右胸の「助縁」は「七衆諸檀越等」すなわち尊像に刻まれた夥多の結縁者のことであるが、左胸の「助縁」は本願化主空無の前にことさらに刻まれていて、これが尊像建立に功績のあった助縁者であったことを示している。推量するにその名から元智房有像は真言の所化から覚彦律師の弟

子と転じた禪融房と思われ、板橋根葉村法谷山蓮華寺前任權大僧都頼見法印有壽は地藏木像を所蔵していた「板橋の町近所の寺」の前任職であり、無覺元了居士は「信心の人」「一信士」の法名だったと解される。禪融房止住の文殊院は板橋区仲宿所在真言宗豊山派幡場山大聖寺で本尊は文殊菩薩。江戸初期に板橋宿の名主で本陣飯田家の菩提寺として、古くから信仰を集めていた延命地藏の境内を拡げて建立されたと伝える。しかし過去帳等に元智また禪融房の名は見当たらない。法谷山蓮華寺は板橋区蓮根所在真言宗智山派医王山東光院蓮華寺で本尊は薬師如来。荒川河畔から移転したというが地藏尊像の陰刻銘文から、元禄二年以前に当地に所在し、法谷山を号していたと知れる。墓碑群中の一基に「十四世權大僧都宥壽享保十二年二月廿八日」と読み取れる墓塔がある。重言すればこの權大僧都頼見法印有壽の止住する蓮華寺所蔵地藏木像が文殊院元智禪融房の仲介で信士無覺元了居士に譲渡されたと推量されるのであって、加えるに蓮華寺と文殊院は至近に所在することから、一信士無覺元了は蓮華寺あるいは文殊院の有力檀越であったとみられる。

なお禪融房がいつ覚彦浄嚴の弟子になったか明らかではないが、文殊院の本寺武王山最明寺安養院は同じ上板橋村に在って板橋宿周辺真言寺院の中核寺院だった。鎌倉幕府執権北条時頼が正嘉元年(一二五七)に中興したと伝える巨刹で、延宝年間(一六七三―一六八二)災禍に遭ったが、それを再興したのが覚彦浄嚴の高弟祐淳大比丘だった。元禄元年(一六八八)のことで、翌二年鑄造の浄嚴筆百字真言を刻んだ梵鐘が遺る。浄嚴は元禄四年(一六九二)に靈雲寺を開創する以前は河内教興寺を根本道場としていたが、貞享元年(一六八四)十一月江戸に巡錫し、同四年九月に帰阪して撰津・河内・大和を巡錫し、再び元禄二年(一六八九)正月に江戸に出て武州周辺を巡錫し、同四年靈雲寺を開創してここを根本道場とし、以来すべて江戸を中心に撰化を行じたのであるが、上田靈城師は貞享二年(一六八五)以降を関東時代と称し、この時期に浄嚴は新安流の軌則を確立し聖教を整備したといわれる。おそらく浄嚴は空無寄進の彩色地藏木像に喜び、新安流の地藏菩薩供養儀軌に則って鄭重に莊嚴供養したものとと思われる。浄嚴が粉郷河内鬼住に建立した葉樹山延命寺は弘法大師空海が地藏の石仏

を刻んで本尊としたのが始まりとされるのであり、俗甥の高弟蓮体は二十九歳のとき玉井山地蔵寺を建立するなど、ともにその行実の根源に地蔵信仰を抱懐していたのである。空無がそれを識っていたとすれば、地蔵木像の寄進は新寺開創を慶賀するにまことに時機を得たことであつた。

※

門弟子某等編『空無行狀』には空無の地蔵についての教相を記してはいない。わずかに前引巻尾の一文に「益<sup>シ</sup>欲<sup>テ</sup>依<sup>テ</sup>彌陀地蔵之願<sup>ニ</sup>盡未來際救<sup>中</sup>度<sup>シ</sup>迷倫<sup>也</sup>」とあつて、空無が弥陀・地蔵一体説を受容しており、それを門弟たちに講説していたことが窺われるが、『巡六地蔵慈悲利益記』には自らの地蔵觀を示すとともに、とくに六地蔵の一々について、その姿形・利生・功德・靈驗を古歌を引いて詳述している。今それを摘記整理すると以下のようである。

巡六地蔵一番「駒込浄土宗桂芳山瑞泰寺の檀陀地蔵は地獄道の能化で柄香炉・御經を持つ。この地蔵は琰魔庁にあって罪人に白状させる役目である。琰魔王は白状に応じて八寒八熱一百三十六地獄に墮とすが、罪人は檀陀地蔵を侍む。地蔵は人頭幢で罪人の舌を巻き口を閉ざしてそれ以上の白状を止めさせるのだ。地蔵本願經にも悪業の報いの咎に軽重があり、地獄の名も様々に書かれている。この地蔵は男女の愛敬を守り、子なき女人に子を与え、平産を守り難産を救い、六道輪廻の業を除き、一切の諸願を叶えて無上菩提に至らしめる利生を施すという。その利生は地蔵本願經・地蔵延命經・地蔵十輪經を、利益は地蔵靈驗記・地蔵利益集を見るがよい。」と記し、さらに「浅草橋辺の大名の家中根氏の息女は生來の腰抜けで立つことができず、薬石効なく、浅草觀音・神田明神・龜戸天神に冥助を請うたが本復しなかつた。元禄五年十五歳の春、近隣に瑞泰寺地蔵に祈願して腰抜けが平癒した人のあるを聞き、一七日を限って日参したところ七日目にはすっかり本復し、息女は歩いて参詣した。」と靈驗譚を記し、地獄の歌として二首を引く。

つくりこし罪を友にてしる人もなくくこゆるしての山道

二條院宣吉（新統古今）

ひとつ身をあまたにかせの吹きりてほむらになすぞかなしかりけり

西行法師（夫木集）

巡六地蔵二番「駒込千駄木林浄土宗一心山專念寺の宝珠地蔵は餓鬼道の能化で如意を持つ。慳貪の罪によって餓鬼道に墮ちた者たちは五百年たつても飲食の名を聞くことはない。だから己の煩惱を掻き散らし我が子を食つて飢をふさぐのだ。そうした者の同類が娑婆にもいて、我が子売つて身命を繋いでいる。この地蔵の持つ如意宝珠は食物の乏しい者に富貴を与え、患う者が立願すれば本復せしめ、商売の人には品々の望みを叶え給うのだ。地蔵延命經や地蔵本願經にいうように、惣じて六地蔵は『衆生の二世の所求を悉く成就せざんば正覺をとらじ』と誓つておられる。」と記し、餓鬼道の歌として二首を引く。

すずしやかかわせのなみに立よればもゆるおもひのミづからぞうき

前大僧正道玄（新統古今）

身をせむるうへのこゝろにたへかねて子をおもふ道ぞわすれはてぬる

後京極撰政（月清集）

巡六地蔵三番「谷中新堀村諏訪社別当真言宗宝林山浄光寺の宝印地蔵は畜生道の能化で輪宝と花鬘を持つ。畜生道に墮ちた者の苦を抜いて樂を与え、飲食を与えて実相甘露の法味を含ませ給うのだ。また人間界においては、子育てに悩む人は信心するがよく、この地蔵を信心する人は盜賊の難・山河の難・諸の横難・毒虫の難・蛇などすべての畜生からの難を逃れる。地蔵延命經にも山神木神・江海水神・蛇神路神は地蔵を信心する衆生を守護するという。だから狐狸にも化されることはない。」と記し、さらに「本駒込御籠町の八木氏何某が眼病を煩い、この地蔵に日参して力の限りに念仏を唱えた。初めは子に手を引かれて参詣していたが、段々回復して二、三十日後には杖を曳いて一人でお参りするようになり、百日の内には両眼が元のように本復した。その御礼として地蔵に捧げた仮名と実名が地蔵堂に残る。」と靈驗譚を記し、畜生道の歌として二首を引く。



かぐらうた草とりかふはよけれどもなをその駒になることうし

西行法師（山家集）

水にすみ雲井にかけることゝるにもうき世のあみはいかゞかなしき

後京極撰政（月清集）

巡六地藏四番「下谷池之端萱町浄土宗影向山心行寺の持地地藏は修羅道の能化で幡と御経を持つ。修羅は地、帝釈は天にあって毎月十六日辰の刻に合戦するが毎回修羅が負け退却する。その途中で修羅が楯を落とすと、楯は天雷のごとき音を響かせながら大海の底に沈む。帝釈は軍鼓を聞いて肝を消し魂を失って無量の苦患を受ける。時に持地地藏は大地をもって修羅の合戦の城郭を警固なさると阿修羅宮は安穩となり、鬭諍の苦患を脱することができるとだ。惣じて人間の嗔恚の炎を消滅し、横死横難・はやり病を除き、男女一切の病を消滅し、また菩提心を増進し給う。」と記し、さらに「宝永二年夏、京橋辺の住人田村氏は五十過ぎの男で両足痛に苦しむ、数年の療治も医薬効なかった。ある日ふっとこの尊像に立願したところ、四、五日過ぎて足の具合も心良く思われて、毎日地藏の御名を唱えているうちに、三十日ほどの内に元のように本復した。立願成就として十二燈を奉納したという。また宝永三年初秋、年のころ二十ばかりのお女中は乳房が腫れ痛むので、あれこれ養生したが治らなかつた。そこでこの地藏に宿願をかけ、一心に地藏の御名を唱えて祈誓したところ、ある夜一人の僧が錫杖を鳴らして家の内に入り来る夢を見た。夢が覚めると同時にその夜のうちから乳房の痛みがよくなった。」と靈験譚を記し、修羅の歌として二首を引く。

須弥の上はめでたき山と聞しかどしゆらの軍ぞなをさはがしき

慈鎮和尚（拾玉集）

浪たてし心の道のすへはまたくるしき海のそこにすむかな

後京極撰政（月清集）

巡六地藏五番「東叡山大仏堂の除蓋地藏は人道の能化で錫杖と宝珠を持つ。生苦の者には平産の薬を与え、老苦には不老の薬を与え、病苦には無

病の薬を与え、死苦には定業を転じて延命を与え、臨終正念にして浄土に生れる愉しみを与え給うという。まことに人道の教主なのだ。人間の八苦を助け、日照りの時には雨を降して国土草木を生長をさせて五穀成就をはかり、あるいは貧乳の女人には乳を出して子どもの長盛を守り、兄弟姉妹の縁薄く仲悪しきを収め、生霊死霊咒の心の病を退治するには信心するがよい。地藏延命経には霊神咒神の祟り、因果の業深い病者は信心すべしとある。男女の愛敬を守り、子なき女人には子を与え平産を守り給う。」と記し、人道の歌として二首を引く。

伊勢のうみあまのうきはうけがたき此身をまたはしづめずもかな

（玉葉集）

ありがたき人になりけるかひありてさとりもとむることゝるあらなん

西行法師（山家集）

巡六地藏六番「金龍山浅草寺観音の寺中正智院の日光地藏は天道の能化で念珠を持つ。天人には大小の五衰があるが、この五衰が現れると必ず死んでしまうが、この日光地藏を信すれば五衰の雲が晴れ、地藏の慈悲によって長寿天に生ずることができるとだ。日光地藏は六地藏の一だが、六地藏は六観音であり、その本地は西方極楽の阿弥陀如来である。諸仏菩薩は大慈大悲を垂れるがゆえに貴く、阿弥陀如来は下化衆生のために観音に化現して六道に迷う衆生を濟度し給うのだ。鈍根の人が信心すれば利根智慧の心眼を開き、業深く貧しき僧俗には富貴を与え、貴人高官には望む官位を与え、奉公人には出世莊嚴の福德を得させるのだ。父母が邪見であれば、子が立願すれば二親の邪心は慈悲の正路を得るはずだ。子どもが枉惑で親に不孝するときは、親が立願すれば父子ともに善心を生じ、男女の仲悪しきには和合を守り給う。六地藏を信心する人の家には大歳神・山神木神・江海水神・饑餓神・一切諸々の仏神の守護があるのだ。」と記す。（引歌なし）

※

右に見るように、空無が六地藏一々について記した文章は六地藏巡りの手引書・案内書でもあって、空無はその製作は六精舎各々がすべきことと期待していたのだが、そうではなかった。『巡六地藏慈悲利益記』「第十、

六地藏靈驗之事」に「さて六ヶ寺の寺方に・誰とりとめて・地藏の靈驗を感じて・しるす人もなきゆへに・よの六鉢にも・其數あるといへども・慥に其意趣を知難・聞およびにまかせ・粗かき記をく所に・未の年類火に焼失せり・地藏不信心の故とせり」とあって、六ヶ寺の寺方に誰もするものがないので、仕方なく独りで地道に書き留めおいたのだ。しかし「未の年」すなわち元禄十六年（一七〇三）十一月二十九日小石川水戸藩上屋敷から出火した水戸様火事の類火に遭って焼失してしまった。だが空無はそれを「地藏不信心の故」と自省して、再び筆を積み重ねたのであって、その不屈不撓の成果が『巡六地藏慈悲利益記』であることは知っておいてよい。第一番瑞泰寺の檀陀地藏は太平洋戦争の戦禍を受けて残骸さえも失われた。しかし「寺社書上駒込肆<sup>18</sup>」に載る文政九年十一月付『由緒書瑞泰寺』に、

一 地藏堂 但シ式間四方 檀陀地藏尊 丈八尺 銅像

御府内六地藏尊第壹番順拜所

源運社本蓋空無作と彫付銘有之其外法号數多記有之候檀陀と唱る哉相分り不申候

元禄六<sup>西</sup>年七世廣譽傳栄代建之

とあって、地藏像の納置後すぐに二間四方の地藏堂が建立されたこと、銅像には空無作の由と多数の法号すなわち結縁施財者名が刻まれていたことが知れる。

第二番専念寺の宝珠地藏は元禄三年鑄造時の原型のままと見える。当像については文京区による調査報告（副島弘道氏編「東京都文京区専念寺銅造地藏菩薩立像調査報告」）があり、光背・基壇が後補であるとの指摘や、助縁の結縁者名をすべて翻刻するなど労作であるが、陰刻の解説や空無の六地藏発願建立を元禄四年（一六九一）とするなど誤りが散見する。<sup>19</sup>

なお後補の石基壇には、中央に「上野同生連中」、右側面に「地藏尊大修理 発起者 妙連大和尚・安立院光輪沙弥・専念寺廿二代学勇和尚」、左側面に「世話人 森本九右衛門・河原崎□□・辻伝助・梶江孫右衛門」、背面に「明治三十三年三月十八日成学勇代」、左右側面に上野同生連中四十余人の名が刻まれている。大修理を主導した妙連（一八七六一九一一）は上野寛永寺浄名律院三十八世で名を幸啓、字を妙連無庵と云い、また地

蔵老比丘を名乗って当寺を地藏山と称し、阿育王塔に倣って明治十二年（一八七九）三月二十四日石地藏尊八万四千体造立の大誓願を発願し、篤信者を教導して同生連を組織するなど廃仏毀釈の打撃に沈む寺院の再興を支援し、石地藏造立に精励する傍ら空無・正元の六地藏巡礼を再興するなど地藏信仰を鼓吹した傑僧だった。六地藏巡礼の手引として妙連の高足谷中安立院光輪が印施した『地藏本願經囑累品』<sup>20</sup>（六地藏巡和讃<sup>21</sup>に載る空無六地藏に関する記述を抄出する（振仮名等省略））。

#### ○六地藏巡再興和讃縁記

昔し元祿の頃江戸に慈濟庵空無上人といふ浄業の僧ありて慈心深く衆生濟度の大願に由りて六鉢の地藏尊を造りて六ヶ所へ安置して毎月廿四日には多くの信者を導き巡る大結縁の法を開き玉へは夫より世に盛んに行われしもいつしか絶へて今は知る人も無かりしをこたび同生連中の辻・森本。梶江。氏の三翁多くの信者に議り此の六地藏巡りを再興して即ち晴雨共に毎月十八日朝八時まで湯島靈雲寺の堂へ集り夫より此六鉢の尊像を巡拜して同志同行諸共に地藏菩薩の大願海に入る結縁の再び興りしあらましを需に應じつゞりて和讃とす 時に明治廿九年十一月十八日にしるす

#### ○六地藏巡再興和讃 地藏老比丘妙連作

歸命頂禮地藏尊 恆沙の誓願おこせるは  
皆是我等法性の 無爲の都を迷ひで、  
六趣の貧里を明暮に 廻も憂しや果しなく  
罪の重荷に身をくだき 無明の暗に親も子も  
しらず生死に苦しむを 憐れみ玉ふ地藏尊  
佛の付囑を憶念し 毎日晨朝入諸定  
入諸地獄令離苦と 六の衢に身を分て  
導く慈悲の御姿 空無上人勸化して  
銅と木をもて造立し 瑞泰寺や専念寺  
浄光寺に心行寺 過ぎ行く上野の慈濟庵  
辿るもよしや淺草の 正智院の寺ぐゝに

奉納て廿四日をば 期して上人月ぐくに

善男善女を導きて 地藏巡りを始しも

いつしか絶て年久し 朽ぬ大士の梓弓

縁しの弦はきれもせで 引るゝ慈悲に今日よりは

六の御寺をまた巡る 路の枝折は後の世を

頼む身をこそ嬉しけれ

巡り来て逢ふぞうれしき六の寺

のちの世たのむ南無地藏そん

南無六道能化地藏大菩薩

空無上人發願造立

○六地藏尊靈場 ○毎月十八日巡拜ノ道順ニ記ス

番外 湯島新花町 靈雲寺

四番 池ノ端七軒町 心行寺

一番 駒込蓬萊町 瑞泰寺

二番 同千駄木町 専念寺

三番 日暮里 淨光寺

番外 谷中五重塔ノ奥 安立院

八万四千躰 上野山内 淨名院

五番 上野慈眼堂内 地藏堂

六番 金龍山仲見世 正智院

番外 淺草 駒形堂

右によって、空無は毎月二十四日にはみずから多くの信者を引導して六地藏巡りを行っていたことや、妙運が再興した明治二十九年には銅鑄六地藏の何躰かはすでに木像に代わっていたこと、また六地藏巡りの再興には同生連が深く係わっていたこと等々が知られる。ただ再興後の道順が空無のそれと同じであったとは思われず、番外に駒形堂のある理由も明らかではない。

第三番浄光寺の宝印地藏は寺伝ではこれを空無造立のものと伝えるが、

これを疑問視する意見も存する。それは当尊像の正面下部に五名の法号とその歿年月日が陰刻並記されているからである。すなわち、

寶安院心譽祐堂居士 文化五辰年十一月廿三日

覺心院慧譽明光大姉 文化三寅年五月九日

説誠院心譽實言居士 文化三寅年六月十九日

實相院證譽誠信大師 文化五辰年十月八日

澤性院雄山玄英居士 文化六巳年三月十九日

とあり、さらに顔立ちや衣文などに見られる作風と銘文の体裁が二番専念寺宝珠地藏像と異なることから、空無初建の由緒を継いで再興されたものと推量されている。しかし作風が専念寺宝珠地藏像と異なるというのであれば、当像には文化年代の陰刻があるばかりで、空無六地藏の由緒を継いだ根拠も再造されたという証左もないのだから、現況だけからすれば当像は右五名の縁者が文化六年（一八〇九）頃に新造したものと理解するのが適当と思われる。もちろん寺伝は当像を空無六地藏の一と伝える。昭和十五年（一九六〇）に六地藏を熱心に調査せられた別所光一氏「空無上人造立の江戸最初の六地藏について」（『武蔵野』四十一巻一）は八十七歳という住職から凡そ次のような話を聞いている。「当像は昭和四、五年頃に地藏堂から現在位置に移したのだが、その際台座下の地中から観音・勢至・彌勒・地藏を型どったおびただし数の素焼像が出土した。中には空無の二文字を刻したものがあつたが檀家が持ち去り、わずか四体を秘蔵するばかりだ。」という。

新堀村の道灌山から諏訪台と続く山手台地は虫聴きの名所として知られ、安藤広重の浮世絵や『江戸名所図会』に描かれた。その一角に諏訪神社と別当浄光寺は隣接して今もある。空無は諏訪神社になぜか深い思い入れがあつたようで、『巡六地藏慈悲利益記』「第廿九、五智堂造立之事」に、「諏訪明神の前に百二十坪余の山屋敷を建てて浄光寺に寄進し、寺社新地奉行にお伺いをたてて五智堂とした。堂には五智如来を安置し、土仏の地藏を千体納めた。五智如来の廣大無辺の種々の仏智と地藏の授記方便によって衆生が苦を離れることを祈願してのことである。地藏堂にも土仏の阿



弥陀千躰・観音千躰・勢至千躰・釈迦千躰を納めた。男女の地藏巡りに結縁させんがためである。社地の存続する限りは五智堂が末代まで退転なきようにと浄光寺と契約している。五智堂の前には願主空無が建てた石塔もある。」と追記している。願主すなわち空無の右の一文によって浄光寺宝印地藏は地藏堂内に安置されていたこと、境内には五智如来堂もあったこと、堂内には夥多の土仏が納められていたこと、その由来を刻したのである。空無建立の石塔があったことが知られる。寺伝では地藏像移座のとき台座下の土中から土仏が出土したというが、『巡六地藏慈悲利益記』原文には「玉佛の地藏千躰をたつる」「玉佛の阿弥陀千躰観音千体勢至千躰釈迦千躰の造立」とあって、土仏は「たつる」「造立」されたのであって土中に埋納されたのではない。空無は過去に万日念仏会を再興した時、説法の法筵に参会して戒訣を受ける者たちに名号札・御影札・泥塑像・銅鑄像を与えている。仏堂の建造に当たって鎮壇のために地中に銅銭・極小銅仏等を埋納する例は少なくないが、こと空無に限ってはその土仏は結縁の証として檀信徒に授与したと考えられる。おそらく空無造立の宝印地藏も五智如来もその堂も、宝永四年（一七〇七）から文化六年（二八〇九）の間に何らかの事情で失われたのであろう。残存した大量の土仏は埋納され、その上に文化六年頃に鑄像された地藏像が安置されたものと推量される。現伝の地藏像が空無六地藏の一とすれば、一番瑞泰寺檀陀地藏・二番専念寺宝珠地藏のように空無と結縁衆の名が印刻されていたらうし、空無六地藏の由緒を引く再造であったとすれば、なおさらその旨の記載があつてしかるべきであり、なにより当像の陰刻が上記五名の法名と歿年月日すなわち命日であつて像建立の施主名ではない。当像は五名の追善供養のために縁者何某によって鑄造されたと解するのが自然のように思われる。なお空無が五智如来を諏訪神社に建立したのは、焼失した越後国分寺の五智如来の再建を申し出たが許されず悔恨が残っていたことと、寛永十三年（二六三六）三月すなわち空無が幼年の頃、木食但唱が芝高輪帰命山如来寺を建立して一丈五軀の五智如来像を安置したことが脳裏にあったからだと思われる。つまり空無は但唱の営為に倣いたかったのである。

第四番心行寺の持地地藏は夙くに空無建立銅鑄地藏像は類火に遭つて失

われ、木造立像として再建されていた。それについて「寺社書上下巻五」収載文政九戌年九月付『境内部調書帳面下谷池之端七軒町心行寺』に、敷地坪数・開山・開基などを記し、

一境内地藏尊 壹躰

但し木佛<sup>ニ</sup>而立像丈八尺江戸六地藏四番目<sup>ニ</sup>御座候

右地藏堂間口九尺奥行式間<sup>ニ</sup>御座候

右之外安置仕候神佛無御座候猶又兩度類焼仕候故古來記録之義者焼失仕候

とあり、またほぼ同内容だが、「御府内寺社備考」の「心行寺」項に、

○地藏堂 間口九尺奥行式間

本尊地藏尊 木立像丈八尺

右者江戸六地藏四番目<sup>ニ</sup>御座候。

○境内凶（略）

以上丙戌書上

○頓蓮社円誉上人利的、姓小島氏、勢州津人。江府下谷池端心行寺開山、寛永七年二月五日寂浄土譜

○江戸志に開山木食空無上人とあれと、此僧ハ二世なりと云索

とあって心行寺の現況が垣間見える。住僧が開山和尚について近藤義休編『江戸志』（寛政年間成立）の誤説を即座に否定できず、六地藏建立の大業が当寺三世空無によるものであることさえ知らず、一番瑞泰寺・二番専念寺・三番浄光寺・五番上野大仏へは杖を曳く老人の足でも小半時もかからぬ至近にありながら参詣した様子もないことに驚く。しかしそれは三世空無・四世空哲と続く法脈がすでに絶え他系に変わっていたことを示唆しているのであつて、類火に遭つて『本誓空無上人道影贊』を失い、焼失した銅鑄地藏尊が木像をもって再造されたことさえ伝わらず、空無創始の六地藏巡礼も虚しく絶えて久しい景色が髣髴する。空無は『巡六地藏慈悲利益記』第三十、佛像造立同寄進寺乃事」に「六地藏第四番此寺は空無居住の所にて廿五のぼさつ十三佛出山の釈迦牟尼如来聖徳太子の尊像二尺五寸

に観音皆々御長一尺八寸宛に造立せしとなりしかりといへども未の十一月の累火にのこらず焼失せり」と記している。「未の十一月の累火」すなわち元禄十六年（一七〇三）十一月二十九日の水戸様火事によって持地地藏はじめ自身が建立した如来諸菩薩の尊像が悉く焼失したというのである。明記はないが伝世の本尊もなにも心行寺はすべて焼失したのであろう。このとき空無は七十五歳だった。長寿を保った空無であるが、残る生涯を心行寺再興に尽力したことは容易に想像できる。おそらく木立像丈八尺の地藏尊は空無の再建であって、それも宝永四年（一七〇九）以前の仕業であったと思われる。

心行寺は大正十四年（一九二五）府中市紅葉丘に移転した。持地地藏もともに移座して境内覆屋に今も祀られている。当像を府中市郷土館編『府中市の仏像』（昭和五十六年十一月）は、「地藏菩薩立像、像高二三六・〇cm、頭部銅鑄製・体軀寄木造、江戸期製作」と報告している。頭部が銅鑄製で体軀が寄木造であることについて、『東京都文京区専念寺銅造地藏菩薩立像調査報告』には「目を細く、鼻や口を小さく作り、耳朶がやや外に張りだす。これらは専念寺像と共通する作風である。おそらくこの銅造頭部は、専念寺像と同じ元禄四年（一六九二）頃に始めの六地藏の一軀として造られたものである。以上のように考えれば、今日残された始めの六地藏の確かな遺品は、専念寺像と心行寺像の頭部ということになる。」と記している。六地藏の造像と開眼供養は元禄三年（一六九〇）であって四年ではないことは前述したが、心行寺持地地藏の頭部が専念寺宝珠地藏と同じく空無作と認められることに得心がゆく。

第五番東叡山大仏堂の除蓋地藏は、宝永四年刊『巡六地藏慈悲利益記』「第十三、六地藏五番之像利生之事」に「東叡山大佛堂の内右脇にあり。此尊像は御門主に奉りて・納おくものなり・大佛堂の内・左脇の弥勒菩薩も・右の施主なり」とあって、堂内は釈迦如来坐像を中尊として、右に除蓋地藏、左に弥勒菩薩が配置され、あたかも当初から釈迦三尊の偉容の中にあるごとく祀られていた。これを沾涼『江戸砂子温故名跡志』に「五番 東叡山 大仏側 慈濟菴」と記すのに対して、月岑『東都歳事記』は「五番 上野大仏堂の内江戸砂子には大仏堂側 慈濟庵に在と記せり」と不審の存するを吐露してい

る。月岑は沾涼の記事を「大仏堂脇に慈濟菴が建っている」と解したのだ。なるほどそうも読める。しかし「東叡山に慈濟菴が奉納した除蓋地藏は大仏の側に安置されている」と解したらどうか。とすれば慈濟菴という私庵は大仏殿の傍らに存在しないことになる。空無はみずから「六地藏第四番此寺は空無居住の所にて」と記しているように生涯を心行寺で送ったのであり、少し推量しても寛永寺には厳然たる法度や下知があったのであり、大仏堂側に、いや東叡山山内に空無の止住する慈濟庵が建っていたなど考え難い。東叡山はいわば江戸幕府の宗教的・政治的な聖域であって、他宗のそれも一木食僧の私庵が許されるとは到底思われぬからである。そうであれば空無が「此尊像は御門主に奉りて・納おくものなり」と記した一文の意味はきわめて重い。一軀の地藏像を奉納したいというその宗教心が認められて初めて地藏像の安置が許されたのである。門主といっても東叡山寛永寺の門主は他に比すべくもない存在であって、すなわち歴代門主は輪王寺宮と称され、日光山東照宮輪王寺門跡・東叡山寛永寺貫主・東叡山輪王寺門跡・比叡山延暦寺天台座主を兼ね続けるいわば仏神そのものである。その許認の言質は容易に得られるものではなかった。そうであれば除蓋地藏の奉納が元禄三年（一六九〇）であったことを念頭すれば、それは新門主公弁法親王に対する祝意の奉呈であったと考えられる。『日光山門跡次第』<sup>24</sup>によれば、四世天真法親王が元禄三年三月一日に薨去すると、その遺命によって公弁法親王が五日に法嗣となり、二十九日には下関し、即日東叡山圓頓院に入室して台宗管領を受職している。すなわち第五番除蓋地藏は公弁法親王の新門主就任を祝って慈濟庵空無が奉納し、露仏であった釈迦大仏の脇に安置したものと解することができる。

釈迦大仏はその創建以来およそ半世紀以上にわたって露仏だった。『東叡山之記』<sup>25</sup>に「大佛堂 本尊釈迦如来 寛永八年。堀丹後守直時。黏<sub>レ</sub>泥<sub>レ</sub>合<sub>レ</sub>建<sub>レ</sub>之。正保年大地震之節。尊像倒碎破矣。其後及<sub>二</sub>明曆萬治<sub>一</sub>。一木食浄雲勸<sub>二</sub>進十方檀越<sub>一</sub>。建<sub>二</sub>立今銅佛<sub>一</sub>。堂宇桂昌院殿寄捨也。當<sub>二</sub>今悉爲<sub>二</sub>御修理所<sub>一</sub>。」とあって、寛永八年（一六三二）越後村上藩主堀丹後守直時が漆喰の釈迦如来坐像を建立したが正保四年（一六四七）の大地震で倒壊し、それを木食浄雲が明暦・万治年中（一六五五―一六六一）に銅鑄像として再興し

て以来、徳川五代將軍綱吉の生母一位大夫人桂昌院（宝永二年（一七〇五）六月歿）が大仏堂を喜捨建立するまで露仏だった。新築の大仏堂には釈迦三尊像のごとく除蓋地藏と弥勒菩薩も安納されたのだが、『武江年表』天保十二年（一八四一）の記事に「十一月晦日夜、上野大佛堂より出火、佛像焼損じ堂宇焼亡す、同十四年御再建あり（慈濟庵空上人建立六地藏の一編并びに彌勒菩薩の像も焼けて御再建あり）とあって、空無奉納の除蓋地藏と弥勒菩薩像は天保十二年に焼失し、同十四年（一八四三）には大仏像とともに再造されたと伝えている。おそらく再び釈迦三尊像のごとく祀られたものと思われるが、除蓋地藏と弥勒菩薩像の天保十四年以降の動向を伝える資料は見当たらない。

それについて前記別所光一氏が右再造の除蓋地藏は寛永寺両大師地藏堂に安置される木造地藏菩薩立像だと指摘されている。別所氏は前引『地藏本願經囑累品（六地藏巡和讃）」に「五番 上野慈眼堂内 地藏堂」とある記載を手掛かりに現地調査を行い、旧に慈眼堂と称した両大師の地藏堂前に「東都六地藏尊ノ内 第五番運勢地藏尊 東叡山地蔵堂」の立札があり、その運勢地藏尊は除蓋地藏のことだととして、天保十四年（一八四三）の再造は木像によるものであり、明治元年（一八六八）の上野戦争でも大仏堂は無事であったが、同六年（一八七三）に大仏堂が取り壊された際にこの除蓋地藏は両大師地藏堂に移転したと推考されたのである。別所氏の指摘に異論はなく、とすれば現今両大師地藏堂には石造地藏菩薩坐像があるばかりで木像はないから、地藏像正面の平成五年（一九九三）再築の阿弥陀堂に安置される木造地藏菩薩立像がそれではないかと思われる。堂内には木造虚空菩薩立像も安置されているが、右肘を胸前で折り掌を衆生に向けたその像様はむしろ弥勒菩薩のように見える。あるいはこれを天保十四年（一八四三）に除蓋地藏像とともに再造された空無寄進の弥勒菩薩像であったと推量しても不適當ではあるまい。なお六地藏巡りを再興した妙運は同生連中らと新たに設定した巡拝路を辿り、かつて除蓋地藏が祀られていた大仏堂跡を拝し、坂道を登って慈眼堂を目差したのであろうが、『六地藏巡再興和讃』には「空無上人勸化して、銅と木をもて造立し、瑞泰寺や専念寺、浄光寺に心行寺、過ぎ行く上野の慈濟庵」と空無の配したであろう巡拝路が詠われている。空無の道順はまことに素直な幹道を行くものである

が、妙運の往返刻々の道順は石地藏四万八千体造立を発願し地藏信仰を鼓吹する妙運にとつて、その根源地である浄名律院は欠くことができなかつたのである。

浅草寺地中正智院の日光地藏は『東都歳事記』「附録」の「最初建立江戸六地藏参」に「當寺のミ此地藏尊見へす今は御丈三尺はかりの地藏尊を安置せり」とあって、空無建立の銅鑄日光地藏像は天保九年（一八三八）以前に失われ、再造もされず、丈三尺ばかりの地藏尊が江戸六地藏日光地藏の代仏として安置されていたと知れる。しかも『文政書上 浅草貳』（文政八年（一八二五））の「南谷正智院」条に、

江戸六地藏第六番 丈四尺六寸 壹躰  
日光地藏尊銅佛 壹躰

とあるので、文政八年（一八二五）頃すでに江戸六地藏六番日光地藏像をめぐっては当院内で混乱が生じていたのである。

この日光地藏尊にまつわって空無は『巡六地藏慈悲利益記』「第五、六地藏建立時靈瑞不思議之事」に次のような靈驗譚を載せている。「六地藏建立を発願し、貴賤男女道俗を勧進して六錢文ずつの助力をもって六躰の尊像を成就しよう」と願望していたのだが、わたしが小者として使っていた三助という男が諸人施財の金銀を納めた錢箱を合鑑を作つて春から秋のころまで少しずつ盗み出していった。ある夜、大金がなくなっているので出家と小者が互に穿議をしあつているところに池ノ端七軒町名主何某・小田原町井筒屋三郎兵衛・茗荷屋勘左衛門・細谷八兵衛などが来合わせ、空無の家来が各々所持している鑑を錢箱に合わせてみると、音もなく錠の開いたのは三助所持の鑑だった。進退窮まった三助は赤面し鼻血を出して座敷を立ち去り、柳屋といふ餅屋に預け置いた盗み金の錢五貫文を持って逃げた。しかし三助は板橋宿まで来て足が止まった。にわかには伊勢参宮の心が生じたからだ。板橋で三助が引き返そうとしたのは、六地藏の鑄形の木像は板橋から出たものなので、きっと地藏が塞き止められたに相違ない。さて三助は敬神伊勢参宮の心が生じたが、行くことができず江戸に帰った。日光地藏は天照大神の本地仏であつて、日のもと六十六ヶ国は日光地藏の本国



なので、その仏力によって三助はどこにも行くことができなかつたのだ。江戸に帰って池ノ端萱町の空無庵の近所に彷徨っていたが、日暮時に行き当たった非人に突き倒された。その光景を見ていた子供たちが三助と知って泥坊どろぼうとはやし立てたので、所の者が取り押さえて空無方へ連行してきた。以前に盗人穿鑿に関わった人たちが再び三助を穿鑿し、遣い残した所持金を取り戻し、追出した。三助は牢人となり、終には乞食になつたということだ。」

この霊瑞不思議譚は龍山必夢撰『延命地藏経直談鈔』(全十二卷、元禄十一年(二六九七)版)にも「江戸六地藏尊建立ノ時盜參錢一菩薩ノ由テ利生ニ取返之縁」(12・20)として載っている。しかし日光地藏にはまったく触れておらず、必夢はこれを地藏菩薩の威神力によって盜賊の難を免れた例証譚・地藏の御罰利生譚の一として記している。文末に「妙幢禪師江府ヨリ傳説」とあり、これが江戸居住の妙幢淨慧から提供された資料と知れるが、おそらくその資料にも日光地藏についての記述はなかつたものと思われる。本来単なる小者三助の悪業譚であるが、空無はそれを六地藏の雛形木像や日光地藏を結んで霊瑞不思議譚に仕立てたものと推量される。理屈後付けの印象が拭えず、巷間に広く語られていた霊験譚とは思われない。

※

必夢撰『延命地藏経直談鈔』には妙幢淨慧ら諸氏から提供された地藏説話を載せるが、右のほかにも空無六地藏に関するものを挙げれば、江戸増上寺所化達道上人よりの伝説という「江戸駒込桂芳山瑞泰寺地藏尊治」(腰抜一靈應)(5・35)と妙幢禪師江府より伝説という「江戸新堀諏訪社淨光寺地藏尊治」(盲眼一靈應)(5・7)はそれぞれ『巡六地藏慈悲利益記』に記された一番瑞泰寺檀陀地藏と三番淨光寺宝印地藏の霊験譚であって、元禄三年(一六九〇)新造の空無六地藏各々の霊験利益が巷間に流布され始めた片鱗を窺うことができる。なお小者三助の横領事件を『延命地藏経直談鈔』は前記のように「江戸六地藏尊建立ノ時盜參錢一菩薩ノ由テ利生ニ取返之縁」として載せるが、これを「元禄二年ノ比、江戸池端慈濟庵空無上人六地藏建立ノミギリ」と伝えている。明確な表現ではないが、仮に「元禄二年」の事件だったとしたら、空無は六地藏尊建立のための勧進を元

禄二年(一六八九)の春から始めて秋までには錢五貫文ほどの蓄財をなし、その年のうちに六地藏を建立し、さらに開眼供養して六精舎に分置したことになる。「元禄二年」は他資料からも否定されるが、しかし錢五貫文の横領事件で大騒ぎになるのだから六地藏を建立できるほどの資金が万端用意されていたとは到底思われない。地藏坊正元はその六地藏尊建立に十三年をかけたのである。三助を僉議した実名の記された面々が有力な檀越だったのだろうか。心行寺が経済力に恵まれた寺院だったとも思われず、あるいは空無自身が資産家であったのだろうか。『空無行狀』『巡六地藏慈悲利益記』によると、六地藏のほかにも空無はその時期は明確ではないが造仏と寄進を繰り返している。以下に列挙すれば、

- 東叡山露仏大仏に弥勒像を寄進。(天保十二年十一月遭難、同十四年再造)
  - 諏訪明神前の山屋敷百二十坪を淨光寺に寄進。五智如来像と堂を建立し、土仏地藏千鉢を納む。
  - 淨光寺地藏堂に土仏阿弥陀像千鉢・同觀音像千鉢・同勢至像千鉢・同釈迦像千鉢及び石塔を納む。
  - 東叡山現龍院如来念仏堂に銅鑄阿弥陀千体仏を寄進。(寅年九月累焼)
  - 東叡山千手觀音堂に一尺八寸の銅鑄觀音像八鉢を寄進。
  - 隆光大僧正の護持院に慧心作五尺の正觀音木像一鉢と三尺三寸の正觀音像二鉢を寄進。
  - 谷中感応寺天台宗四世蓮台院の代に延寿堂の念仏本尊として三尺の阿弥陀如来像を寄進。
  - 長一寸の銅像二万余を元禄元年から宝永三年までに道俗に施与し、土仏一万余の購入を契約。
  - 豆州熱海淨土宗清嚴寺所蔵の長八寸の銅鑄百体觀音と一尺八寸の阿弥陀木像の購入を契約。
  - 心行寺退隱後、元代の淨土僧照庵炬菩薩の故事に倣って銅鑄阿弥陀像一千鉢を道俗深信者に施与。
- 等々であるが、心行寺に晋山して再興した万日念仏会の折々には参会の檀信徒に自筆の名号や書画のほかに土仏を長期間に涉って施与し、万日会が満散しないうちに銅像二万余の施与を始めるなど驚くばかりである。右は

宝永四年（一七〇七）以前の寄進・施行行であって、九十一歳を超える長寿を保った空無の後年の行実は明らかではない。なお空無は谷中感應寺天台宗四世蓮台院の代に延寿堂の念仏本尊として阿弥陀如来像を寄進したというが、感應寺天台宗四世蓮台院は大僧都天純のことで、天純は宝永元年（二七〇四）感應寺に入寺して蓮台院の院号を賜り、同三年（二七〇六）に示寂しているから、空無の寄進はその間ということになる。空無に同じく、空無が地蔵信仰鼓吹の先達として敬愛する黄檗の禅僧妙幢淨慧も感應寺に地蔵菩薩像を寄進している。各別の証左があるわけではないが、二人の善業は軌一期一に連動したものであったように思われる。

※

空無は『巡六地藏慈悲利益記』「第廿五、谷中感應寺京都壬生寺延命地藏移造立之事」に妙幢淨慧のことを、「妙幢淨慧禪師は四宗兼学の行法堅固の修行者で、ことに仏菩薩像を造立する志は諸僧をはるかに超越しており、武州に二度も地蔵尊像を造立したほどだ。一度目は八尺立像を東叡山内に安置したが累焼したので再造し、別の場所に安置した。もう一度は京都壬生寺すなわち宝幢三昧寺の十益を授くという本尊延命地藏菩薩の写しを谷中感應寺に寄進している。壬生寺本尊は三井園城寺の快賢僧都が仏師定朝に造らせたものだが、それに倣って妙幢禪師は京仏師法橋瀧川順正に命じ、その助力に四蓮の不著と雅丈を指名した。順正は六斎日を勤めるなど精進潔白して掌善・掌悪両童子を脇侍とする七尺五寸の地藏像を製作した。まことに順正は定朝、妙幢禪師は快賢の化身といふべきである。壬生地藏を真諦とすれば感應寺地藏は俗諦であり、感應寺地藏を真諦とすれば妙幢禪師は俗諦ということになる。真・俗の両因は相応して衆生に利益を施すのであり、地藏菩薩の誓願は深重なので、たとえ一鉢であってもその功德は六地藏と同じである。『地藏菩薩秘記』に弘法大師の最勝王経の釈を引いて、『本地と垂迹の關係は難解だが、南方の宝相仏・宝勝仏は妙幢菩薩に変化する。妙幢は地藏の異名である。』と説いている。とすれば妙幢菩薩と妙幢淨慧はそれぞれ体は別でも、地藏を意味する妙幢の名は同じだから、これを名体不離と考えれば、妙幢淨慧は妙幢菩薩と同じ地藏なのである。すなわち感應寺の地藏は妙幢淨慧という地藏が作った地藏なので

あって、その感應甚大なこと、感應の語をもって知ることができる。」といささか強引で難解な紹介をしている。しかしこの一文に淨慧は喜んだことだろう。『地藏菩薩秘記』（内題『與願金剛地藏菩薩秘記』全一卷）は龜山院の第七皇子で第百世天台座主だった良助法親王（一二六八—一三二八）の撰述と伝えられるもので、その伝写本を偶々見出した淨慧がこれを元禄三年（一六九〇）版に起こしたのであって、以後これをもととした版本が寛保二年（一七四二）・天保九年（一八三八）・文久元年（一八六一）・明治四十五年（一九一三）と近代まで陸續公刊されることになる。まさに地藏信仰を鼓吹する四宗兼学の禅僧妙幢淨慧の面目躍如たるものであったと知れる。空無は同書中の「妙幢は地藏の異名である」という要句を採って淨慧の行業を称揚したのである。それは『巡六地藏慈悲利益記』に序文を寄せられた淨慧に対する至心からの賛辞だった。右『巡六地藏慈悲利益記』には空無が淨慧の著作を重んじていた痕跡が散見し、年若い淨慧に対する空無の崇敬と親炙はきわめて深いものであったと容易に推量できる。

おそらく空無は淨慧の工房を訪れていたのだろう。瀧川順正は不明だが、雅丈は靈雲寺開山覚彦淨嚴と交流のあった人物で、淨嚴の雅丈宛書簡が遺り、不著は我が国文人篆刻の嚆矢池永道雲（一六七四—一七三七）の実兄で黙爾とも称した人である。不著・道雲の父方の祖父新山仁左衛門は江戸に開かれた最初の黄檗宗寺院永寿山海福寺の開基で、隠元を開山に迎えて二世となった独本性源（一六一八—一六八九）は仁左衛門の妻性雲尼の弟、つまり二人にとって大叔父だった。不著は独本が相州大井の北条政子創建という石蔵山浄業寺を中興したとき檀越のごとき助勢をしている。淨慧は池永道雲家所蔵の阿弥陀如来像をめぐる靈験を宝永八年一月版『佛神感應錄』<sup>28</sup>卷十三「靈像ノ彌陀尊種々ノ現益ヲ施玉フ事」に記し、道雲の兄不著について「不著ハ。ステニ出塵ノ身トナリテ靜ニ勤修セラル」と書き止めており、また道雲の印譜集『一刀萬象』を絶賛する「都智山印韻誌」<sup>29</sup>（正徳二年（一七一三）五月）を撰するなど、淨慧と道雲の親交も深い。なお四蓮は淨慧の行実を慕う宗派を超えた緇素道俗の小衆だったとみられるが、その一人であろう青年不著の一日を覚彦淨嚴が伝えている。『妙極堂遺稿』<sup>30</sup>卷七・元禄十丁丑年行年五十九条に、「書ニ新山不著居士手寫ノ法華經ノ之後

六八二」として、「去る元禄九年（二六九六）十二月四日、江戸の新山道水居士、字を不著という清新な青年が妙法蓮華經を書写した大本七冊を携え訪ねて来た。不著がいうには今年元旦に筆を起し、十月九日に書写し終えたもので、仏成道日に供養をお願いしたいという。手を洗い熏じて拝読すると、筆力は健やかで強く、筆先は快活で、字々画々、虎が踞り獅子が怒っているようでありながら、驚くことに一字として失字誤字がない。筆遣いがただ巧みだというだけではない。そのまことに篤い信心がそうさせたのだ。ああこの素俗の青年の勤めはすばらしいものだ。それを比べれば繙門にあるものはさらに策励すべきである。そんなわけで臘月八日に齋を設けて供養したのである。それが今夏また訪ね来て書写本の奥に一筆を乞うた。わたしもすでに耳順六十だ。無常も近く藻翰も無理ではあるが固辞する理由もないので、『能仁不寂回三千、斯典為人殊解纏』二云の賛偈を書き付けおいた。まことに妙法蓮華經は、その一字一字が金色の仏となり、今現在も無辺界までも衆生を拔済してくださることだ」と繙門に入る以前の身心ともに純真高潔な青年不著を伝えている。

※

六地藏の造立について、空無も正元も『蓮華三昧經』の所説に拠ったものだとするむきが大方である。槌かに正元は『江戸六地藏尊建立之畧縁起』（宝永三年一七〇六）に「六地藏の図」を載せ、みずから「御姿ハ十王經によるなり。利益記ハ蓮花經にしたかふ」とその出拠を明らかにしている。正元のいう「蓮花經」は『蓮華三昧經』すなわち『妙法蓮華三昧秘密三昧耶經』のことである。しかし同経は「大日本統藏經」に収載されてはいるが、その経文中に六地藏のことは見当たらないのである。それでは六地藏について記す『蓮華三昧經』が別にあるのだろうか。だがそれをいくら探しても見出せず、空無・正元の六地藏造立を『蓮華三昧經』の所説に拠るとする先学も誰一人として『蓮華三昧經』の所在を明かし、経文の当該箇所を示してくれてはいないのだ。思えばそれも当然である。空無も正元も『蓮華三昧經』なる經典一本を座右に置いてはいなかったからである。彼らが見たのは妙幢淨慧が元禄三年孟陬上浣に版行した『地藏菩薩秘記』の、そこに引かれた『蓮華三昧經』の経文・要句であった。二人はともに参考

とした聖教典籍の中に『地藏菩薩秘記』を挙げている。なお現今『蓮華三昧經』なるものの存在は真偽未決のようであり、『地藏菩薩秘記』も良助法親王撰を疑うむきが少なくない。

それにしても、空無や正元が『地藏菩薩秘記』に引く『蓮華三昧經』のわずかな経文・要句から六地藏造立の意義を見出し、それを発願の意図として明確に示し、眷属夥多の衆生を教化勧進して施財を得、六地藏造立を結願成就したことに驚く。空無はみずから浄土木食を称するが、他にそう自称した人を知らず、正元は自歴を語らず、わずかに指灯・手灯・手香・六万度礼拝・百万遍地藏菩薩称名を行じた廻国行者らしいと知れるだけで、二人は既存の宗門・宗派の埒外の存在にみえる。ただ空無は浄土宗心行寺の住持職にあったから埒外の存在とはいえぬが、しかしその行実は埒外であった。『空無行狀』によれば空無は五十四歳のとき疾を得て心行寺を高足還誉空哲に譲り荷葉庵に退隠したが、木食行は退転なく続けていた。一日二人の僧が訪い来て「身悴精涸老病」たる空無に対して、「穀を喫し鹽を食するのは報命を保つためである。『蘇波呼童子經』『瞿醯經』等に、食を断ち鹽を食さず油を食さないのは垢膩を除き身を清浄ならしめるためだと説いているではないか。師の仏道修行を邪魔をしようというのでも、木食を止めろというわけでもない。」といい、さらに「寧自<sup>レ</sup>ハ辟<sup>レ</sup>穀<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>如持<sup>レ</sup>淨<sup>レ</sup>齋」と云った。すなわち二人がわが身を案じて来てくれたのではなく、不持齋を難詰しに来たことを察した空無は、笑いながら「不<sup>レ</sup>持<sup>レ</sup>齋者<sup>レ</sup>是<sup>レ</sup>天台成意比丘<sup>レ</sup>之迹<sup>也</sup>ト也」と応えたという。空無の面目躍如、真骨頂がここにある。空無を批判難詰した二人は戒律遵守に厳しい寺の真言僧だろう。過ぎたる木食行も問題だが、それよりもまず持齋を守れというのである。しかし二人の挙げた『蘇波呼童子經』『瞿醯經』には、二人の発言に見合う文言は見当たらない。因みに『瞿醯經』すなわち『蕤呬耶經』は「大正新修大藏經」に収録されているが、その底本は巻尾に「靈雲校本末云貞享三稔六月九日一校了是為明日授與諸徒也。河南教興傳瑜伽上乘沙門淨嚴四十有八」とあって覚彦浄嚴の校訂と知れる。浄嚴はまた折々『蘇波呼童子經』を講じてもいる。浄嚴の、というわけではないが、二人はどこぞで何某の講説を受け天台成意の行業を知っていたのであろう、反論で



きずに去った。成意のことは『日本往生極楽記』（十一、成意十禅師）・『古昔物語集』（巻十五第五「比叡山定心院僧成意往生語」）にみえる。「比叡山定心院の成意は内供奉十禅師に選ばれたほどの素性潔白で染着するところのない高德であったが、持齋を好まず、朝夕に齋を撰った。ある日弟子が成意に向かつて、『一山の名徳たちはみな齋食している。なぜ師匠だけなさらないのか』と尋ねた。すると成意は『わたしは本性が貧なのだ。それに日供のほかは食物を得るところがない。だから今は心の有りようにしたがって供米を食しているだけだ』といい、さらに『或る經に、心礙<sup>31</sup>菩提<sup>32</sup>食不礙<sup>33</sup>菩提<sup>34</sup>』とあるぞと答えると、弟子は得心した」という。叡山といわず僧院の僧たる者の第一に守るべきは持齋であって、東大寺戒壇院の戒和上明祐は一生涯持齋を通じた人として崇敬せられたが、成意は或る經を引いて「心は菩提を礙げるが、食は後世の菩提を礙げはしない」と主張し、持齋という建前や形式を否定したのである。すでに石橋義秀氏<sup>31</sup>に指摘があるが、成意のような生き方は平安時代においては特異であり、それは法然のあり方に通じるという。法然も持齋について問われたとき、「答ての給はく。尼法師の食の作法は。もともとしかるへしといへとも。當世は機すでにをとりへたり。食すでに減したり。この分際をもて一食せは。心ひとへに食事をおもひてしづかならじ。菩提心經にいはく。食菩提をさまたげず。心よく菩提をさまたぐといへり。そのうへは自身をあひはからふへきなり」と（『黒谷上人語燈録』巻十五）と答えている。「或經」は知らず、「菩提心經」は今日伝わらぬようだが、空無は成意や法然と同じ思いを抱いていて、その本源を成意に求めたのである。持戒持律を是とする二人と、入定を究極の理想とする木食とは端から話が合うはずもなく、まして空無は既存の形式や建前を否定しているのである。そうした平生を空無は以後も続けたと『空無行狀』は伝えている。

※

不持齋を難詰されたからといって空無が破戒僧で、心行寺の僧風が乱れていたわけではない。二十四歳のとき陰を自糞して淫欲を断ち、退隱後も穀断ち鹽断ちの激しい木食行を続け、還曆を迎えてなお浄土木食を自称しているのであり、後継の空哲も「持律嚴整」だったというから、心行寺は

浄土門においても他に比して早くから持戒持律を堅く遵守する寺風を備えていたことが知れる。しかし空無が律幢を掲げて心行寺を律院に、あるいは木食寺にしようとした形跡も窺えず、空無の法脈も永続しなかったようだから、木食は空無一代のことであつたと思われる。しかし二人の僧との問答から、俊正明忍（慶長十五年（一六一〇）歿）が京都榎尾平等心王院を拠点に起こした戒律復興の風潮が漸く江戸にも及んでいたことが察せられる。池之端から湯島に切通を上れば覚彦浄嚴が元禄四年（一六九二）に如法真言律の宝林山靈雲寺<sup>33</sup>を草創するのだし、東叡山を登れば一山三十六坊中の浄名院<sup>34</sup>が享保八年（一七三三）には安樂律派の律院と定められている。浄土宗においても浄土律が勃興し、享保五年（一七二〇）靈潭性激（明和六年（一七六九）歿）が京都東山に浄土律院の嚆矢たる照臨院を開くと、以後弟子たちによって各地に律院が興され、江戸においても増上寺四十五世成誉大玄<sup>36</sup>（宝暦六年（一七五六）歿）が律院の建立を企て目黒の高峯山長泉院に律幢を掲げ、璣珞和上敬首<sup>37</sup>（寛延元年（一七四八）歿）が花俣の思惟山三昧寺正受院に入って定めた規則が浄土律院の模範となった。奥羽には在世時から聖僧と崇敬された桑折の守一無能<sup>38</sup>（享保四年（一七一九）歿）が持戒念仏を弘め、無能に全幅帰依した曹洞の禅峰待定<sup>39</sup>（享保十六年（一七三一）歿）が忍行念仏を實踐して衆庶の熱狂的な帰依を受けた。また如法真言律の湯島靈雲寺二世戒琛慧光の膝下から浄土に転じた天誉大我<sup>40</sup>（天明二年（一七八二）歿）が臨死念仏を創始して異能を放っている。しかし何もかにも空無より一代また二代も後のことであつて、浄土門において他に比して早く持戒持律を徹底した空無の行業は覚えておいてよい。なお無能も待定も大玄も空無と同じく羅切僧であるが、無能と大玄は『宋高僧伝』第二十六「唐上都青龍寺光儀伝」に伝える、根を断じて志を守ったという光儀の所業に倣ったのだが、空無が羅切や木食行をどこで学んだものか明らかではない。大仰にいえば近世は木食の時代であつて、有相無相の木食行者が諸國に輩出し遊行徘徊した。著名な遊行造仏の木食修験円空（元禄八年（一六九五）歿）や木喰五行明満（文化七年（一八一〇）歿）等々、その多くは巷間衆庶に密接に係わつた生涯を送つたが、京都東山に方広寺と大仏を造営した高野の木食応其順良<sup>41</sup>（慶長十三年（一六〇八）歿）や京都日岡峠を改修し

た東山安祥院の木食養阿正禪(宝暦十三年(一七六三)歿)のように、史上に遺る大業を果たした木食も少なくない。

空無の六地藏造立も大業といえるが、それにはたとえば前述したように、六地藏第三番宝印地藏を浄光寺に安置した際、隣接する諏訪神社に五智如来を建立したのは、寛永十三年(一六三六)三月すなわち空無六歳の頃、芝高輪に帰命山如来寺を建立して一丈五軀の五智如来像を安置した木食但唱の宮為に倣ったものかと推量したが、空無の行業の背景にはつねに木食の存在があったように思われる。空無は十三歳のとき神田山幡随院新知恩寺に入ったが、その開山は幡随院上人智誉白道(慶長二十年(一六一五)歿)であって、白道は慶長八年(一六〇三)夏、但唱の師弾誓と互いに師資の契約を結び、弾誓は檀特山弥陀直受の法を白道へ、白道は白幡一流の法を弾誓に伝授し合ったのであるが、このことはすなわち乱髪垂肩の浮浪の山居念仏行者であった弾誓が公的存在として認められたことを意味し、弾誓とその一流の活動を容易にさせるものであった。高弟但唱が芝高輪に土地を拝領して如来寺を創建し、信州伊那で造立した五智如来を、天竜川を下り海上を北にとって霊岸島に運び、如来寺に安置できたのもそうした経緯があったからである。それにしても高輪如来寺の五智如来は「芝大仏」として浅井了意の『江戸名所記』(寛文二年(一六六二))や菱川師宣画『江戸雀』(延宝五年(一六七七))に紹介されて夥多の貴賤衆庶の参詣を集めたのであり、芝増上寺に学んだ青年僧空無が知らぬはずはなく、白道と弾誓の交流を心得ていればなお、但唱の所業に影響を受けたとして不思議ではない。そうであれば六地藏第五番除蓋地藏を東叡山大仏の傍らに安置したのも、度重なる地震で倒壊した漆喰の釈迦如来坐像を鑄造再建したのが木食浄雲であったことと無関係ではあるまい。

木食としても空無は異端だった。浄土木食を自称しながら不持齋であるなど許されることではないからだ。持齋は木食といわず、僧たるものの堅く守るべき制戒であり難詰されて当然だった。それについてかつて花石公夫氏が『閉伊の木食 慈泉と祖晴』(一九九八年十月、自刊)で奥州閉伊に活躍した秀井慈泉(享和元年(一八〇一)歿)・佛眼祖晴(文化三年(一八〇六)歿)という木食の兄弟を斯界に初めて紹介され、兄慈泉が「日本三行

脚僧」、弟祖晴が「定齋不臥不炊」「定齋不臥獨処不炊」「定齋不臥持経沙門」「定齋不臥抖擻」と署名していたこと、二人は曹洞宗僧で、常州水戸の羅漢寺開山木食観海から木食戒を受け、ともに故郷に戻ってひたすら在地に貢献したこと等々を考究せられている。この二人よりも数年前、宝暦十二年(一七六二)に木喰五行明満も羅漢寺観海から木食戒を受けている。おおよそ木食戒は明かされることがないが、観海から授けられた木食戒を慈泉・祖晴の署名から窺うことができる。すなわち「定齋」は齋に係ること、辟穀の供食を定められた刻限に食する持齋のこと、「不炊」は火食を避け、「不臥」は横臥をせず、「持経」は法華経をたもち、「獨処」は独居・独行すること、「抖擻」は煩惱を捨てるために山林中で仏道精進する意で、行脚もそれに相当するのであろうと解される。空無も何某から木食戒を受けたはずであるが、戒に逸脱して不持齋の平生を送る理由や意図を『空無行状』も空無自身も自著に言及していない。不明というほかはないが、きわめて興味深いのは空無が木食行を行わずうちに好相を得たと『空無行状』が伝えていることだ。すなわち、心行寺開山利的上人創始の万日念仏会の復興を志した折のこと、

上人與同志五人堅誓佛天懇禱冥祐鐘磬徹曉說法竟(日)絶穀披衣常在佛前長坐不臥日課五百拜如(ス)是者十餘年(ス)文中默坐(ス)時偶見諸佛菩薩護法善神親現(ス)室中(ス)知(ス)是(ス)佛天(ス)加被(ス)

とあって、木食行を行じながら祈請する空無は諸仏菩薩護法善神の来現を夢見たのである。あたかもそれは自誓受戒を志す僧たちが願ってやまない好相<sup>46</sup>であって、好相を得た空無はその木食行による祈請が諸仏善神から認められ許されたことを意味している。同様なことは木食五行明満の弟子で甲斐の木食を自称した白導も体験している。『甲斐木食白導一代記』<sup>47</sup>によれば、安永七年(一七七八)、おそらく二十四歳のとき、北海道久遠郡御哥山の弥陀釈迦不動の石像を祀る岩屋で生涯木食を自誓した折のこと、

二仏にちかひて是より生涯五穀・塩を断て、木食の行をして念仏修行すべし。若破らバ命を取玉へ、その告なくバ谷へ落て死なんと座禪して告を待に、向

に御声ありて、善かな汝奇特のおもひをして爰に来る。末世の人智慧もなく、機根も薄し。学文して悟ることもかたし。此故にこそ如来は永劫の難行・苦行をましまして、瘡痂・文盲のもの罪障の軽重によらず信心して、御名を唱へ頼バ、勝取不捨と洩らさぬ御誓ひなれば、後世のためにハ智慧も宝もいらねバ、唯念仏をとらふべきなり。然るに汝念仏にふしをつけてうたふ。人をすゝめる方便にハ、哥をうたひ又狂言綺語もゆるさん。かたじけなくも二尊の御前にて御名をうたふこと物躰なし。汝正直にして心付ざるゆへ我しらするなり。願にも行にも念仏に増したるはなし。怠ることなかれと御声はやみにけり。

と白導は不動明王の夢告を得た。この直後から白導は造仏を始めているから、白導の生涯を決定づける重大な好相夢告だった。

空無は自身の行業が諸仏善神の認めるところであり、仏天の加被加護さえ得ていると信じていたのであって、何事によらずその判断には自信を持っていただろうと推察される。不持齋を難詰されても笑って成意の古例を引いたのも、その表れに相違ない。なお『空無行状』は空無の法名を「本譽上人諱<sup>ハ</sup>遵察字<sup>ハ</sup>空無自稱<sup>ニ</sup>放憨子<sup>ト</sup>源蓮、其<sup>ノ</sup>社號也」と伝えている。しかしこの法名にはあってしかるべき阿号がない。授与されなかったのか、あるいはみずから辞退したものか不明だが、空無は心行寺住持職にあったころ前賢<sup>48</sup>に倣って禅要を独学していた折、黄檗の宗匠から面受を受けたという一居士<sup>48</sup>から親しく禅要を伝授されている。黄檗の宗匠は隠元隆琦（寛文十三年（一六七三）歿）のことと考えられるから、すなわち空無は黄檗正統の禅要を承けたのである。浄土木食の自称は持戒持律を厳しく実践する木食行者として、さらに浄禅双修する浄土僧としての誇り高い宣言であった。使い古された言葉であるが異端というほかはない。

注

1 国立国会図書館デジタルコレクションに據る。

2 朝倉治彦氏『東都歳事記』（一九七二年十一月、平凡社東洋文庫）は「景誉空哲」とするが、版本はあきらかに「還誉空哲」である。

3 国立国会図書館デジタルコレクションに據る。

4 国立国会図書館デジタルコレクションに據る。

5 渡浩一氏編『延命地藏経直談鈔』（一九八五年九月、勉誠社）所載影印に據る。

6 了慧撰『黒谷上人語燈録』卷五所収（西村九郎右衛門校『漢語燈録・和語燈録』一八八一年十月、護法館）に據る。

7 「新訂増補国史大系」所収に據る。

8 筒井英俊氏校訂『東大寺要録』（一九七一年五月、国書刊行会）に據る。

9 谷信一氏「仏像造顕作法考―歴世木仏師研究の一節として」（『美術研究』五四・五五・五六号、一九三六年六月・七月・八月）は開眼・供養等の宗教的意義について深く考察されている。

10 関口静雄「浄土木食空無撰『巡六地藏慈悲利益記』翻刻と解題」（『学苑』九四九号、二〇一九年十一月）に據る。

11 東京大学総合図書館蔵『江都六地藏尊勸進帳』（刊年不明、一冊）所収に據る。

12 大橋乙羽校訂『校訂紀行文集』（七版、一九一三年十月、博文館）所収に據る。

13 上田靈城師編『浄嚴和尚傳記資料集』（一九七九年八月、名著出版）所収に據る。空無寄進の彩色地藏木像は、かつて境内に存した智嚴院の本尊地藏菩薩像であったか。

14 三好龍肝氏編『真言密教靈雲寺派関係文献解題』（一九七六年十一月、国書刊行会）所載の翻刻に據る。

15 平井和成氏編『安養院縁起』（二〇一二年一月、武王山最明寺安養院）。

16 上田靈城師「新安流成立過程の研究」（『密教文化』一三六・一三七号、一九八一年十二月・一九八二年二月）。

17 畑市次郎氏『東京災害史』（一九五二年五月、都政通信社）・吉原健一郎氏『江戸災害年表』（西山松之助編『江戸町人の研究』第五卷所収、二〇〇六年三月、吉川弘文館）。

18 国立国会図書館デジタルコレクションに據る。

19 宝珠地藏の左胸陰刻を「分置千武蔵州六所」とするが、刻筆順から「千」ではなく「干」と判断できる。「干」はしばしば「于」と混用される。

20 地藏妙運については飯田聖音氏『八萬四千體地藏尊縁起』（昭和三年三月、浄名院）・中川光輪氏『地藏比丘の餘影全』（大正二年三月、浄名院）に詳しい。

21 本経は安立院主天台沙門光輪拜記印施。明治三十九年（一九〇六）五月初版。大正二年（一九一三）十一月八版（上野山内浄名院光輪印施本）に據る。



- 22 文京区教育委員会教育推進部庶務課編刊「文京区文化財年報」平成23年度・平成24年度所載『副島弘道氏編東京都文京区専念寺銅造地藏菩薩立像調査報告』に據る。
- 23 台東区教育委員会編刊「台東区文化財調査報告書」第三十一集『御府内寺社備考3（浄土宗）』（二〇〇三年三月）に據る。
- 24 「統群書類従」第四輯下所収に據る。
- 25 「統群書類従」第四輯下所収に據る。
- 26 早稲田大学図書館所蔵『覚彦書状』（一通）。
- 27 関口静雄「妙幢淨慧撰『古今舍利驗論』翻刻と解題（三・了）」（『学苑』九五号、二〇二〇年三月）に池永道雲とその周辺についての記述がある。
- 28 阿部美香・大久保美玲・塚本あゆみ・関口静雄「妙幢淨慧撰『佛神感應錄』翻刻と解題（七）」（『学苑』九三七号、二〇一八年十一月）に據る。
- 29 西尾市岩瀬文庫蔵「松平君山写『一刀萬象後集』人冊」に収録されている。
- 30 寺津麻理絵・関口静雄「妙高山靈光寺蔵『妙極堂遺稿』翻刻と解題（七・完）」（『学苑』九〇一号、二〇一五年十一月）に據る。
- 31 石橋義秀氏「平安仏教から鎌倉仏教への展開―『今昔物語集』の仏教説話を通して」（『真宗文化』二十号、二〇一一年三月）所収。
- 32 佛教大学図書館デジタルコレクションに據る。
- 33 『浄嚴大和尚行状記』（上田靈城師編『浄嚴和尚傳記資料集』へ一九七九年八月、名著出版）所収。
- 34 『東京府寺院明細帳』（島田筑波・河越青士氏編『東京都社寺備考』へ一九四四年九月、北光書房）に據る。
- 35 林照順氏編『有栖川宮家御由緒照臨院誌』（一九三三年十一月、照臨院）。
- 36 『三縁山志』「卷十一、成誉大玄大僧正」（『浄土宗全書』第十九輯所収）。
- 37 『略伝集』「敬首和上略伝」（『浄土宗全書』第十八輯所収）。
- 38 『無能和尚行業記』（『浄土宗全書』第十八輯所収）。関口静雄「かへらぬむかししらぬ行末―羅切僧のこと―」（『学苑』九一七号、二〇一七年三月）。
- 39 関口静雄・宮本花恵「出羽待定法師忍行念仏伝（上・下）」（『学苑』八五二・八五七号、二〇一一年十月・二〇一二年三月）。
- 40 三田村鳶魚氏「傑出した大我和尚」（『三田村鳶魚全集』第十六所収）。中野三敏氏「大我狂簡」（『江戸狂者傳』二〇〇七年三月、中央公論新社）。
- 41 和多昭夫氏「木食心其考（前・承）」（『密教文化』五五・五六号、一九六一年

- 六月、一九六二年十月）。
- 42 柴田実氏『安祥院と木食養阿上人』（一九五五年十一月、日限安祥院）。
- 43 品川区立品川歴史館編刊『大井に大仏がやってきた！ 養玉院如来寺の歴史と寺宝』（二〇一三年十月）。
- 44 関口静雄「弾誓・澄禅・常字資料(1)〜(4)」（『学苑』九五・九三四・九三六・九四九号、二〇一七年十一月〜二〇一九年十一月）。
- 45 関口静雄「水戸羅漢寺境内之図」（『学苑』八七四号、二〇一三年八月）。
- 46 好相については高松世津子氏「自誓受戒の好相行・好相をめぐる考察―近世期・真言律系を中心に」（『日本宗敎文化史研究』四十六号、二〇一九年十一月）が参考になる。
- 47 西川広平・近藤暁子氏「資料紹介『木食白導一代記』」（山梨県立博物館研究紀要）第三集、二〇〇九年三月）に據る。
- 48 居士の名が記されないのは憚ることがあったのだろう。推量のほかないが、黄檗の宗匠すなわち隠元隆琦（一五九二―一六七三）の面受の弟子となれば、即座に序文を寄せた悦山道宗（一六二九―一七〇九）を挙げうる。しかし『空無行状』の一文から和僧のようであり、すると妙幢淨慧かと思われるが、『巡六地藏慈悲利益記』には淨慧の名は憚らず何度も記している。空無が心行寺任職として十年余を過ごし、蓮池の木食上人と世評を高めていたところに親昵したとすれば了翁道覚（一六三〇―一七〇七）であろうか。了翁については『国立国会図書館蔵『錦袋圓祖傳』翻刻と解題』（『学苑』九一七号、二〇一七年三月）に触れたが、了翁が池之端仲町に菓舗錦袋園を開き、池中に経蔵を築き、これを東叡山内に移して勸学講院として開創し、その寿像と高泉性激撰文の「道行碑」が建てられるなどはほとんど空無の行業と時空が重なっている。昼夜を問わずに空無の室に出入したというのは近隣を思わせ、ともに生年を同じくし、薬石に詳しく、羅刹でもあり、なにより持戒持律、慈善勸化において通底している。親近しない理由はない。

〔翻刻凡例〕

- 一、可能な限り原文の表記を尊重した。
- 一、「己・巳・已」等の混用字体は文意をとって適字を置いた。
- 一、判読不能の文字は字数分の空格（□）を置いた。



「表表紙欠

「贊01オ

本譽空無上人道影贊

鎮西ノ正派

心行ノ中興

卅歲ニ割キ愛ヲ

名山ニ擔レフ笠ヲ

毳衣落落

意氣騰騰

懇禱喫レシ苦ヲ

靈應見ルレ徴ヲ

除キ陰ヲ絶シ穀ヲ

啓蒙ヲ度ス僧ヲ

知恩ニ司職シ

感隨ニ稟承ス

攝シ機ヲ三輩ニ

歸ス佛ニ十稱ニ

曾テ著ハシ藥辨一ヲ

大ニ醫ニ邪乘一ヲ

寫ニ施シ聖號一ヲ

造レ像然シ燈

探ニ教外ノ旨一ヲ

嚼ニ火裏ノ冰一ヲ

退ニ居シ荷葉一ニ

密ニ爾ス叡陵一ニ

或ハ隱レ或ハ顯レ

維レ張リ維レ弘ム

萬日會滿テ

六句臘登リ

範シ六地藏一ヲ

開ニ道ス羣朋一ヲ

重重ノ悲願

無レ所無シ能

歷劫ノ慈濟

叔世ノ規繩タリ

我レ述テ讚語一ヲ

永傳ニフ雲仍一ニ

元祿壬申季秋穀日一髮道人無生敬題

密林居士



「贊02オ

（白丁）「贊02ウ

慈濟本譽上人行錄

序

空無察公鐘披之后葵ニ傾シテ淨土ヲ修ニス專念ノ法ヲ長季木食凡百ノ之味「序01オ不  
レ塔ニ於懷ニ根門又除シテ第二之重無レシ路ニ於想ニ藉テ此ノ忍力ニトス他ノ難行ヲ  
加ニ之開テ勸善懲惡之爐ニ精ニ鍊シ皂素ヲ下ニシテ與樂「序01ウ拔苦之網ヲ慈ニ濟ス沈  
淪一大乘小乘兼轟信浪檀浪相接ル名ニ之ヲ澆末希有之上人ト疇殺テ間然センヤ  
哉今願鑪ニ就地藏「序02オ銅像長壹丈ナルヲ安ニシテ諸レヲ東都ノ六招提ニ庸備ニフ羣  
生ノ歸向瞻禮ニ維レ行維レ願憲ニ章ス契經ニ其ノ徒運譽及ヒ檀信等狀ニ上人ノ行  
「序02ウ業ヲ一价ニシテ高野幽山ニ要ス現東海カセシ一辭ヲ於其ノ端ニ因テ命ニ毛氏ニ聊  
カ塞ク其ノ責一且ツ寄セテ言ヲ運譽等ニ曰ク君カ輩既ニ知ニレリ昔年ニ願王ノ一  
「序03オ身化スルコトヲ六ト也即今於ニ真空無相之中ニ示ニ現シ比丘ノ體ニ慈濟堂裏ニ與  
ニ諸仁者一行ニ百般佛事ヲ還テ信得及ニマ麼無ニハ喚テ在ニ東「序03ウ家ノ之丘ト則テ  
好シ矣

元祿辛未夏日宗忽

天倫題

天倫氏

宗忽之印

「序04オ

（白丁）「序04ウ

上人ノ功行最モ深廣聽テ我レ今朝對シテ衆ニ言フ多載布衣勝ニ錦綉ニ尋常樹菓是レ  
甕殮彌陀ノ寶號宣ヘ萬畫ニ地藏ノ銅軀範ス「序05オ六尊一更ニ喜フ參禪弘ニ志願ヲ心  
空及第徹ニ「根源ニ

南岳悅山宗書

悅山

宗書之印

「序05ウ

心行寺第三世源蓮社本譽空無上人行狀

門弟子 某等 編

本譽上人諱ハ遵察字ハ空無自稱ス放憨子ト源蓮ハ其ノ社號也石見州ノ人父ハ山口母ハ某氏寛永庚午七年十二月初三日ニ生ル態度不凡九歳ニシテ投シテ幡譽上人ニ剃染シ從<sub>レ</sub>三方譽上人ニ受<sub>レ</sub>業ヲ十三ニシテ入<sub>レ</sub>幡隨意院一知恩寺專學<sub>二</sub>淨教<sub>一</sub>十七ニシテ登<sub>レ</sub>總之下州大岩寺二十二ニシテ又隸<sub>二</sub>武之増上寺<sub>一</sub>自悲<sub>二</sub>識見淺薄<sub>一</sub>正保之間詣<sub>二</sub>目黑山<sub>一</sub>求願<sub>二</sub>期<sub>一</sub>一七日斷<sub>二</sub>絶<sub>一</sub>飲食<sub>一</sub>晝夜課<sub>二</sub>千拜<sub>一</sub>感<sub>二</sub>異夢<sub>一</sub>下<sub>レ</sub>山ヲ嗣後又禱<sub>二</sub>宇賀神<sub>一</sub>每夜<sub>一</sub>狀01オ誦<sub>レ</sub>呪ヲ萬遍如<sub>レ</sub>スルモノ此ノ者三年逐<sub>レ</sub>テ詣<sub>二</sub>相之江ノ島<sub>一</sub>投<sub>二</sub>身<sub>一</sub>於<sub>レ</sub>鯨波ニ感<sub>二</sub>放光動地<sub>一</sub>意<sub>ニ</sub>謂<sub>レ</sub>密家ノ呪法速<sub>ニ</sub>有<sub>二</sub>神驗<sub>一</sub>一時<sub>ニ</sub>夢<sub>レ</sub>一老僧<sub>ニ</sub>云<sub>ク</sub>我自<sub>二</sub>傳通寺<sub>一</sub>來<sub>ル</sub>以<sub>三</sub>汝但憑<sub>二</sub>加持之力<sub>一</sub>ヲ甚違<sub>二</sub>彌陀<sub>一</sub>本願<sub>ニ</sub>夫<sub>レ</sub>學<sub>セ</sub>ハ三密ノ觀行<sub>一</sub>末世ノ凡夫難<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>證<sub>レ</sub>人<sub>一</sub>若<sub>シ</sub>以<sub>二</sub>此<sub>一</sub>法<sub>ニ</sub>誓<sub>レ</sub>欲<sub>セ</sub>ハ度生<sub>一</sub>ト則<sub>レ</sub>魔障屢<sub>レ</sub>起<sub>レ</sub>ト也夢覺<sub>テ</sub>徧體汗流<sub>レ</sub>寒毛卓豎<sub>レ</sub>疑<sub>テ</sub>爲<sub>二</sub>辨天之靈應<sub>一</sub>也及<sub>レ</sub>見<sub>二</sub>傳通開山<sub>一</sub>了譽上人<sub>一</sub>之頂相<sub>一</sub>乃知<sub>二</sub>夢中<sub>一</sub>所<sub>レ</sub>見<sub>レ</sub>即<sub>レ</sub>了譽上人<sub>一</sub>也愈<sub>レ</sub>喜<sub>二</sub>淨土<sub>一</sub>有<sub>レ</sub>緣<sub>一</sub>時<sub>ニ</sub>有<sub>レ</sub>賜紫<sub>一</sub>沙門洞院<sub>一</sub>淨公<sub>一</sub>云<sub>ク</sub>友人<sub>ト</sub>善<sub>ニ</sub>常<sub>ニ</sub>嘆<sub>ニ</sub>上人<sub>一</sub>ノ精進<sub>一</sub>ニシテ弗<sub>レ</sub>懈<sub>ニ</sub>至<sub>二</sub>二十四歲<sub>一</sub>自<sub>レ</sub>謂<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>生<sub>一</sub>外<sub>一</sub>輪轉<sub>セ</sub>ラルハ<sub>一</sub>者<sub>一</sub>以<sub>二</sub>姪<sub>一</sub>欲<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>本<sub>一</sub>阿難<sub>一</sub>遭<sub>レ</sub>難<sub>一</sub>狀01ウ益<sub>レ</sub>因<sub>レ</sub>也此<sub>一</sub>也若<sub>シ</sub>不<sub>レ</sub>除<sub>レ</sub>姪<sub>一</sub>無<sub>レ</sub>由<sub>レ</sub>成<sub>レ</sub>ス道<sub>一</sub>當<sub>ニ</sub>先<sub>ニ</sub>斷<sub>二</sub>身<sub>一</sub>而<sub>レ</sub>後<sub>レ</sub>除<sub>レ</sub>心<sub>一</sub>遂<sub>ニ</sub>自<sub>レ</sub>積<sub>二</sub>其<sub>一</sub>陰<sub>一</sub>又<sub>レ</sub>經<sub>二</sub>數歲<sub>一</sub>厭<sub>レ</sub>諸<sub>一</sub>緣<sub>一</sub>務<sub>一</sub>有<sub>レ</sub>妨<sub>二</sub>專修<sub>一</sub>乃<sub>レ</sub>辟<sub>レ</sub>穀<sub>一</sub>斷<sub>レ</sub>鹽<sub>一</sub>客<sub>一</sub>難<sub>一</sub>云<sub>ク</sub>教<sub>一</sub>中<sub>ニ</sub>日<sub>一</sub>患<sub>レ</sub>姪<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>止<sub>二</sub>自宮<sub>一</sub>其<sub>一</sub>陰<sub>一</sub>佛<sub>一</sub>謂<sub>レ</sub>之<sub>一</sub>曰<sub>ク</sub>若<sub>レ</sub>斷<sub>二</sub>其<sub>一</sub>陰<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>如<sub>レ</sub>斷<sub>二</sub>心<sub>一</sub>上<sub>一</sub>人<sub>一</sub>何<sub>レ</sub>ソ<sub>レ</sub>斷<sub>レ</sub>内<sub>一</sub>而<sub>レ</sub>斷<sub>レ</sub>外<sub>一</sub>耶答<sub>テ</sub>曰<sub>ク</sub>因<sub>レ</sub>身<sub>一</sub>生<sub>レ</sub>心<sub>一</sub>身<sub>一</sub>若<sub>レ</sub>斷<sub>レ</sub>則<sub>レ</sub>心<sub>一</sub>無<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>生<sub>一</sub>也客<sub>一</sub>又<sub>レ</sub>曰<sub>ク</sub>我<sub>一</sub>聞<sub>レ</sub>律<sub>一</sub>制<sub>一</sub>自<sub>レ</sub>積<sub>二</sub>其<sub>一</sub>陰<sub>一</sub>者<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>許<sub>レ</sub>下<sub>レ</sub>與<sub>二</sub>諸比丘<sub>一</sub>共<sub>レ</sub>住<sub>一</sub>上<sub>一</sub>雖<sub>レ</sub>舊<sub>レ</sub>住<sub>一</sub>者<sub>一</sub>必<sub>レ</sub>驅<sub>レ</sub>出<sub>一</sub>今<sub>一</sub>上人<sub>一</sub>如<sub>レ</sub>此<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>亦<sub>レ</sub>違<sub>レ</sub>乎答<sub>テ</sub>曰<sub>ク</sub>汝<sub>一</sub>唯<sub>レ</sub>聞<sub>レ</sub>一<sub>一</sub>未<sub>レ</sub>聞<sub>二</sub>其<sub>一</sub>二<sub>一</sub>也菩薩<sub>一</sub>於<sub>レ</sub>法<sub>一</sub>尚<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>惜<sub>二</sub>身命<sub>一</sub>況<sub>レ</sub>其<sub>一</sub>餘<sub>一</sub>乎以<sub>レ</sub>故<sub>一</sub>或<sub>レ</sub>然<sub>ニ</sub>身<sub>一</sub>臂<sub>一</sub>指<sub>一</sub>或<sub>レ</sub>施<sub>レ</sub>與<sub>二</sub>頭目髓腦<sub>一</sub>諸<sub>一</sub>大乘<sub>一</sub>中<sub>一</sub>所<sub>レ</sub>深<sub>レ</sub>讚<sub>一</sub>也又<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>見<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>量<sub>一</sub>狀02オ壽<sub>レ</sub>經<sub>一</sub>云<sub>ク</sub>設<sub>レ</sub>我<sub>一</sub>得<sub>レ</sub>佛<sub>一</sub>他<sub>一</sub>方<sub>一</sub>國<sub>一</sub>土<sub>一</sub>諸

菩薩衆聞<sub>ニ</sub>我名字<sub>一</sub>至<sub>二</sub>于得<sub>レ</sub>佛<sub>一</sub>諸根闕漏<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>具<sub>レ</sub>足<sub>一</sub>者<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>取<sub>二</sub>正覺<sub>一</sub>以<sub>レ</sub>是<sub>レ</sub>觀<sub>レ</sub>之<sub>一</sub>則<sub>レ</sub>我<sub>一</sub>今<sub>一</sub>之<sub>一</sub>所<sub>レ</sub>闕<sub>一</sub>當<sub>レ</sub>來<sub>レ</sub>具<sub>レ</sub>足<sub>一</sub>之<sub>一</sub>因<sub>一</sub>也汝<sub>一</sub>今<sub>一</sub>雖<sub>レ</sub>具<sub>レ</sub>足<sub>一</sub>恐<sub>レ</sub>ハ當<sub>レ</sub>來<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>闕<sub>一</sub>乎客<sub>一</sub>乃<sub>レ</sub>信<sub>レ</sub>伏<sub>一</sub>而<sub>レ</sub>去<sub>一</sub>一日<sub>一</sub>至<sub>二</sub>藝之廣島<sub>一</sub>先<sub>レ</sub>是<sub>一</sub>有<sub>二</sub>以<sub>レ</sub>八上人<sub>一</sub>行業<sub>一</sub>純<sub>一</sub>ニシテ縑<sub>レ</sub>素<sub>一</sub>漢<sub>一</sub>欽<sub>レ</sub>從<sub>レ</sub>其<sub>一</sub>化<sub>一</sub>者<sub>一</sub>甚<sub>レ</sub>夥<sub>一</sub>今<sub>一</sub>見<sub>二</sub>其<sub>一</sub>餘<sub>一</sub>風<sub>一</sub>猶<sub>レ</sub>在<sub>一</sub>且<sub>レ</sub>驚<sub>レ</sub>且<sub>レ</sub>愧<sub>一</sub>將<sub>レ</sub>從<sub>レ</sub>前<sub>一</sub>所<sub>レ</sub>作<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>善<sub>一</sub>之<sub>一</sub>業<sub>一</sub>一時<sub>一</sub>頓<sub>レ</sub>斷<sub>レ</sub>專<sub>レ</sub>修<sub>二</sub>念佛<sub>一</sub>從<sub>レ</sub>幡隨意院<sub>一</sub>岳<sub>一</sub>譽<sub>一</sub>上人<sub>一</sub>時<sub>一</sub>號<sub>レ</sub>漢<sub>一</sub>玉<sub>一</sub>上人<sub>一</sub>受<sub>二</sub>淨土<sub>一</sub>血脈<sub>一</sub>竝<sub>レ</sub>圓<sub>レ</sub>頓<sub>レ</sub>菩薩<sub>一</sub>戒<sub>一</sub>明<sub>レ</sub>曆<sub>一</sub>中<sub>一</sub>心<sub>一</sub>行<sub>一</sub>寺<sub>一</sub>蓮<sub>一</sub>社<sub>一</sub>純<sub>一</sub>譽<sub>一</sub>上人<sub>一</sub>視<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>克家<sub>一</sub>迎<sub>レ</sub>主<sub>一</sub>席<sub>一</sub>於<sub>レ</sub>是<sub>一</sub>法<sub>一</sub>緣<sub>一</sub>狀02ウ不<sub>レ</sub>振<sub>レ</sub>紺<sub>一</sub>字<sub>一</sub>改<sub>レ</sub>觀<sub>レ</sub>其<sub>一</sub>開<sub>レ</sub>山<sub>一</sub>頓<sub>レ</sub>蓮<sub>一</sub>社<sub>一</sub>圓<sub>レ</sub>譽<sub>一</sub>利<sub>一</sub>的上<sub>一</sub>人<sub>一</sub>先<sub>レ</sub>創<sub>レ</sub>萬<sub>一</sub>日<sub>一</sub>念<sub>レ</sub>佛<sub>一</sub>會<sub>一</sub>以<sub>レ</sub>糧<sub>一</sub>食<sub>一</sub>闕<sub>一</sub>將<sub>レ</sub>欲<sub>レ</sub>斷<sub>レ</sub>絶<sub>一</sub>上人<sub>一</sub>與<sub>二</sub>同志五人<sub>一</sub>堅<sub>ク</sub>誓<sub>二</sub>佛天<sub>一</sub>懇<sub>ニ</sub>禱<sub>一</sub>冥<sub>一</sub>祐<sub>一</sub>鐘<sub>一</sub>磬<sub>一</sub>徹<sub>レ</sub>曉<sub>一</sub>說法<sub>一</sub>竟<sub>レ</sub>日<sub>一</sub>絶<sub>レ</sub>穀<sub>一</sub>披<sub>レ</sub>衣<sub>一</sub>常<sub>ニ</sub>在<sub>二</sub>佛前<sub>一</sub>長<sub>一</sub>坐<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>臥<sub>一</sub>日<sub>一</sub>課<sub>二</sub>五百拜<sub>一</sub>如<sub>レ</sub>スルモノ是<sub>レ</sub>者<sub>一</sub>十<sub>レ</sub>餘<sub>一</sub>年<sub>一</sub>寬<sub>一</sub>文中<sub>一</sub>默<sub>レ</sub>坐<sub>一</sub>時<sub>一</sub>偶<sub>レ</sub>見<sub>二</sub>諸佛菩薩<sub>一</sub>護<sub>レ</sub>法<sub>一</sub>善<sub>一</sub>神<sub>一</sub>親<sub>一</sub>現<sub>一</sub>スル<sub>一</sub>室<sub>一</sub>中<sub>一</sub>知<sub>レ</sub>是<sub>レ</sub>佛<sub>一</sub>天<sub>一</sub>ノ加<sub>レ</sub>被<sub>一</sub>乃<sub>レ</sub>依<sub>レ</sub>其<sub>一</sub>形<sub>一</sub>相<sub>一</sub>手<sub>一</sub>刻<sub>二</sub>三尊<sub>一</sub>又<sub>レ</sub>命<sub>レ</sub>工<sub>一</sub>造<sub>レ</sub>レム<sub>一</sub>之<sub>一</sub>凡<sub>一</sub>ヘテ<sub>一</sub>百<sub>一</sub>尊<sub>一</sub>今<sub>一</sub>安<sub>ニ</sub>聖<sub>一</sub>衆<sub>一</sub>堂<sub>一</sub>者<sub>一</sub>是<sub>レ</sub>也<sub>一</sub>其<sub>一</sub>餘<sub>一</sub>泥<sub>一</sub>塑<sub>一</sub>銅<sub>一</sub>鑄<sub>一</sub>印<sub>一</sub>施<sub>一</sub>畫<sub>一</sub>像<sub>一</sub>書<sub>一</sub>施<sub>一</sub>聖<sub>一</sub>號<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>勝<sub>レ</sub>計<sub>一</sub>每<sub>一</sub>日<sub>一</sub>說<sub>レ</sub>法<sub>一</sub>筵<sub>一</sub>受<sub>レ</sub>戒<sub>一</sub>訣<sub>一</sub>者<sub>一</sub>凡<sub>一</sub>十<sub>一</sub>萬<sub>一</sub>人<sub>一</sub>籌<sub>一</sub>將<sub>レ</sub>盈<sub>レ</sub>室<sub>一</sub>時<sub>一</sub>人<sub>一</sub>咸<sub>レ</sub>稱<sub>二</sub>蓮池<sub>一</sub>ノ木<sub>一</sub>食<sub>一</sub>上<sub>一</sub>人<sub>一</sub>ト云<sub>フ</sub>上人<sub>一</sub>嘗<sub>レ</sub>言<sub>ク</sub>狀03オ上<sub>レ</sub>古<sub>一</sub>教<sub>一</sub>門<sub>一</sub>ノ之<sub>一</sub>名<sub>一</sub>德<sub>一</sub>無<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>探<sub>レ</sub>禪<sub>一</sub>要<sub>一</sub>若<sub>シ</sub>不<sub>レ</sub>明<sub>レ</sub>禪<sub>一</sub>要<sub>一</sub>則<sub>レ</sub>難<sub>レ</sub>救<sub>一</sub>我<sub>一</sub>弊<sub>一</sub>輒<sub>レ</sub>欲<sub>レ</sub>禪<sub>一</sub>時<sub>一</sub>有<sub>二</sub>一居士<sub>一</sub>嘗<sub>レ</sub>見<sub>レ</sub>槩<sub>一</sub>下<sub>一</sub>宗<sub>一</sub>匠<sub>一</sub>來<sub>一</sub>與<sub>レ</sub>之<sub>一</sub>締<sub>一</sub>方<sub>一</sub>外<sub>一</sub>ノ交<sub>一</sub>日<sub>一</sub>夜<sub>一</sub>道<sub>一</sub>話<sub>一</sub>因<sub>レ</sub>其<sub>一</sub>激<sub>一</sub>發<sub>一</sub>兼<sub>レ</sub>學<sub>一</sub>坐<sub>一</sub>禪<sub>一</sub>雖<sub>レ</sub>然<sub>ニ</sub>未<sub>レ</sub>三<sub>一</sub>月<sub>一</sub>窺<sub>二</sub>教外<sub>一</sub>之<sub>一</sub>藩<sub>一</sub>籬<sub>一</sub>一日<sub>一</sub>居<sub>一</sub>土<sub>一</sub>以<sub>二</sub>上<sub>一</sub>ノ旨<sub>一</sub>詰<sub>レ</sub>之<sub>一</sub>上<sub>一</sub>人<sub>一</sub>茫然<sub>一</sub>無<sub>レ</sub>措<sub>一</sub>自<sub>レ</sub>玆<sub>一</sub>發<sub>レ</sub>憤<sub>一</sub>打<sub>レ</sub>坐<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>問<sub>一</sub>晝<sub>一</sub>夜<sub>一</sub>入<sub>二</sub>居士<sub>一</sub>ノ室<sub>一</sub>茶<sub>一</sub>扣<sub>一</sub>者<sub>一</sub>一日<sub>一</sub>或<sub>レ</sub>ハ兩<sub>一</sub>三<sub>一</sub>回<sub>一</sub>動<sub>一</sub>至<sub>二</sub>五六次<sub>一</sub>問<sub>一</sub>答<sub>一</sub>往<sub>一</sub>復<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>悉<sub>一</sub>記<sub>一</sub>如<sub>レ</sub>是<sub>一</sub>激<sub>一</sub>勵<sub>一</sub>數<sub>一</sub>月<sub>一</sub>工<sub>一</sub>夫<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>弛<sub>一</sub>居<sub>一</sub>士<sub>一</sub>一<sub>一</sub>夜<sub>一</sub>遊<sub>二</sub>心<sub>一</sub>行<sub>一</sub>寺<sub>一</sub>與<sub>二</sub>上人<sub>一</sub>共<sub>レ</sub>坐<sub>一</sub>至<sub>二</sub>三<sub>一</sub>度<sub>一</sub>月<sub>一</sub>朗<sub>一</sub>天<sub>一</sub>空<sub>一</sub>居<sub>一</sub>士<sub>一</sub>詠<sub>一</sub>和<sub>一</sub>歌<sub>一</sub>示<sub>レ</sub>之<sub>一</sub>上<sub>一</sub>人<sub>一</sub>於<sub>レ</sub>此<sub>一</sub>始<sub>レ</sub>信<sub>二</sub>佛心宗<sub>一</sub>有<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>傳<sub>一</sub>之<sub>一</sub>妙<sub>一</sub>貞<sub>一</sub>享<sub>一</sub>甲<sub>一</sub>子<sub>一</sub>ノ秋<sub>一</sub>以<sub>レ</sub>疾<sub>一</sub>辭<sub>レ</sub>院<sub>一</sub>命<sub>一</sub>上<sub>一</sub>於<sub>レ</sub>此<sub>一</sub>足<sub>レ</sub>還<sub>一</sub>譽<sub>一</sub>空<sub>一</sub>哲<sub>一</sub>公<sub>一</sub>爲<sub>二</sub>心行<sub>一</sub>第<sub>一</sub>四<sub>一</sub>世<sub>一</sub>自<sub>レ</sub>退<sub>一</sub>於<sub>レ</sub>荷<sub>一</sub>葉<sub>一</sub>菴<sub>一</sub>以<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>終<sub>一</sub>焉<sub>一</sub>之<sub>一</sub>地<sub>一</sub>時<sub>一</sub>上<sub>一</sub>人<sub>一</sub>五<sub>一</sub>十<sub>一</sub>四<sub>一</sub>歲<sub>一</sub>矣<sub>一</sub>其<sub>一</sub>菴<sub>一</sub>臨<sub>レ</sub>蓮<sub>一</sub>池<sub>一</sub>ノ上<sub>一</sub>風<sub>一</sub>飄<sub>一</sub>露<sub>一</sub>散<sub>一</sub>香<sub>一</sub>恆<sub>一</sub>滿<sub>一</sub>室<sub>一</sub>住<sub>レ</sub>此<sub>一</sub>或<sub>ハ</sub>



念佛或ハ坐禪毫無レ所レ繫物外ノ生涯瀟洒トシテ可レ見ツ一日有二兩僧一來テ云上人  
身悴精涸レ老病モ亦加ハル宜ク喫レ穀食鹽ヲ而保ニ報命ヲ竊ニ考ルニ教中ニ童子經  
經等有ニ斷レ食不レ食レ鹽不レ食レ油等ノ文ニ只要スス除レ垢膩ヲ令中ト身ヲ清淨ナラ  
非レ謂ニハ爲レ妨道而モ遺斷スルト也寧自レハ辟レ穀不レ如持レ齋上上人笑テ云  
我以ニ辟レ穀之易ヲ乃換レノ齋ニ耳今不レハ持レ齋者是レ天台成意比丘ノ之迹也ト也  
時ニ勸レ鹽ヲ受レ之ヲ以嘗レ壯歲已來辟レ穀ト云テ到于老年一不レ改焉見聞無レ  
不ト云ク「欽仰」退居ノ之後四來蟬聯トシテ而求ニ佛像聖號一者不レ休マ毎レトニ與一  
尊一教ム下彼稱ニ佛名一或ハ百聲或ハ千聲以テ至中一萬十萬上其ノ善巧方便  
如レ此人或時讀ニ天如則禪師ノ錄ヲ有リ錢塘照菴ノ炬菩薩ト云人結ニ四十八人  
會ヲ鑄ニ銅像一之事上上人且嘆シテ而欲レ効レ之ニ鑄ニ彌陀銅像一千尊ヲ散シテ  
施ニ道俗淡信ノ者一夜夢ラク一女人至ル姿色艷雅ニシテ而告テ云ク上人宜ク施ニ  
佛像一又可ニ造立ニ老後之利益往生之助因不レ可レ過レ之ニ誠ニ末法中相應之事  
也我モ亦擁護シテ喜ニ捨セント家珍一言訖而去上人目ニ送スルニ之ニ至蓮池ニ失  
レ跡ヲ」狀04ウ覺後潛ニ告ク諸徒ニ咸云ク苟非ニ辨天ニ必ス龍女ナラント也上人云ク  
我自ニ幼年一來夢中ニ所レ感非ニ但一ニ不レ可ニ悉ク記一慎勿レ語レ人ニ今時  
ノ庸輩妄ニ說テ妖怪ヲ魔ニ魅シ男女一自稱ニ方便ト取ニ信ヲ於人ニ貪ニ求レ財利ヲ徒  
助レ引ニ魔往生ニ魔往生説ニ甚違ニ稱名ノ正業ニ也時ニ萬日ノ念佛會上人中興シテ  
空哲繼レク焉哲モ戒律嚴整ニシテ兼助ニ修造ヲ金仙之殿香積之堂頗ル勝レリ於舊  
觀ニ哲不幸ニシテ早世ス厥ノ後同志ノ徒等助レ之ニ元祿庚午四月十五日滿ニ散ス萬日  
ノ念佛會一江城ノ貴賤諸國ノ緇素蟻集リ市ニ歸シテ隨喜稱讚ス或ハ受ケテ十聲ノ念  
佛一或ハ求ル手書ノ名號一者不レ知ニ幾千ト云ク時ニ上人年已ニ六十又一  
也其ノ行願之深「可レ知」矣授ニ與ニ淨土ノ訣ヲ於道俗一者ノ一百餘人自度ニ僧尼  
ヲ若干人至ニ於問法結緣ノ者ニ指不レ違レ屈スルニ先キ是ヨリ己巳ノ年廻春二十四  
日近鄰ニ有ニ某信士ト云モノ夢ニ感ニ地藏菩薩一今年復夢ニ拜ニ勝軍地藏ヲ於愛宕

山ニ又夢ニ安ニシテ地藏ノ像ヲ於一室ニ有レ人如下將ニ附ニ與ニ勢ノ端嚴妙相尤  
可ニ瞻仰ス三ニ感セリ地藏之靈應一後有二僧一偶ノ至テ告レ土ニ云ク某處ニ有ニ木  
雕ノ地藏長可ニ一丈ニ汝欲レ下下ハ加ヘテ莊嚴ヲ以供養上ト我當レ與レ之士歡喜  
シテ迎レ之時ニ上人問レ之ニ云ク汝欲レレニ莊嚴ト此像ヲ耶士曰爾リ上人云ク幸クハ  
與レ我ニ我欲レ依ニ此ト云ク狀05ウ大像ニ鑄ニ造ニ銅像ニ六軀ヲ安ニ于武城ノ六所ニ可  
以テ福中利ス羣生也士大ニ喜レ與レ之於レ是ニ四衆競捨ニ淨財ヲ不レ日像成ル誠  
ニ一奇事也昔鎮西ノ聖光上人感ニ地藏ヲ又信貴山ノ圓能上人獲ニ靈應一等載  
見ニ史籍ニ不レ違ニ枚舉スルニ上人有ニ老母一爲レ盡シテ心孝養ス實ニ釋門之老  
萊也今改ニ所居ヲ扁シテ爲ニ慈濟菴ト益欲レ依ニ彌陀地藏之願ニ盡未來際救中  
度ト迷倫上也上人甲子己ニ週シ畧記ニ其ノ行實ヲ以酬ニ慈誨ノ之萬一ト云フ

元祿三庚午年臘月朔日

「狀06オ

（白丁）「狀06ウ

「裏表紙欠

（せきぐち しずお

本学名誉教授）